

# 総社市埋蔵文化財調査年報 13

(平成 14 年度)

2004年3月

総社市教育委員会

# 序

総社市は温暖な気候で知られる「晴れの国」岡山の南部に位置します。市域の大半を占める吉備高原南端の急峻な山々と清流等が織りなす豊かな自然と、岡山三大河川である高梁川により育まれた肥沃な平野は、古来より「古代吉備文化」と呼ばれる歴史的風土を醸し出してきました。

この古代吉備の中心に位置する総社市には作山古墳、備中国分僧寺・尼寺や古代山城の鬼ノ城等の全国的に著名な歴史遺産が残されています。

こうした先人達が残した文化と生活の足跡といえる数々の貴重な文化財を、後世に残し伝えることは現在を生きる我々に課せられた義務であり、使命であると考えます。

総社市の文化財行政を担う教育委員会としても、国民共有の財産である埋蔵文化財の保護と、市民生活の向上を目指す社会資本整備の開発の調和には細心の注意と努力をもって対処してきました。

また、近年の文化財に対する国民意識の変化と高まりに対応し、貴重な文化遺産である遺跡を保護するだけでなく、市民の歴史教育の場として活用する目的で全国有数の古代山城「鬼ノ城」の発掘調査と整備復元工事を平成17年完成の予定で進めております。

このように、文化財行政においても社会の変化に対応した新しい発想に基づく普及啓発活動の必要が求められつつあり、行政資料である発掘成果の公表・活用は情報公開の観点からみれば課せられた義務であります。

本書は、総社市教育委員会文化課が平成14年度に行った事業活動の概要をもとめたもので、その成果の一端を速報的に掲載したのですが、文化財保護と歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、当教育委員会の文化財保護行政にご指導・ご協力をいただいた関係機関、関係各位の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

総社市教育委員会

教育長 栗田 交三

## 例 言

1. 本書は総社市教育委員会が平成14年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会確認調査等について、その概要をまとめたものである。
2. 本書はそれぞれの調査担当者である文化課職員谷山雅彦、武田恭彰、平井典子、高橋進一、松尾洋平が執筆し全体の編集を武田が行った。各文末に執筆者名を記し文責とする。
3. 出土遺物・資料の整理及び図版の作成にあたっては、近藤雅子、田中富子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は特記するもの以外は海拔高であり、遺構図の方位は国土座標が記されたものを除き全て磁北である。
5. 本書に使用した地形図は特記するもの以外は総社市発行のものを複製している。
6. 本書にかかわる実測図、写真及び遺物等の資料は総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南清手265-3）で保管している。
7. 本書の刊行にあたり御指導、御教示を賜った関係各位に厚くお礼申し上げます。

# 目 次

## 序 文

## 例 言

### 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2002年度（平成14年）文化財行政の概要	1
-----------------------	---

### 2. 立会及び確認調査の概要

共同住宅建設に伴う試掘調査	5
自動車車庫建設に伴う立会調査	7
農家住宅増築に伴う立会調査	8
自動車整備工場増築に伴う試掘調査	9
老人福祉施設建設に伴う試掘調査	11
一戸建て住宅改築に伴う立会調査	13
個人住宅に伴う立会調査	14
個人住宅増築に伴う立会調査	15
個人住宅新築に伴う立会調査	16
共同住宅建設に伴う試掘調査	18

### 3. 発掘調査概要

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査（7）（狩谷遺跡）	19
山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査（8）（ヤナ砂遺跡）	23
山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査（9）（八紘1号墳）	28
久米大池1号墳測量調査	32
東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査	37
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	38
吉備路観光センターの計画変更に伴う発掘調査	40
作山古墳現状変更に伴う立会調査	42
岡山日産自動車（株）総社営業所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	55
平成14年度鬼ノ城発掘調査概要	59

### 4. 史跡整備事業の概要

鬼城山環境整備事業	63
-----------	----

## 目 次

<p>第1図 立会・確認発掘調査位置図 (S=1/10,000) …… 4 共同住宅建設に伴う試掘調査</p> <p>第2図 調査地位位置図 (S=1/6,000) …… 5</p> <p>第3図 トレンチ配置図 (S=1/1,000) …… 6</p> <p>第4図 土層断面図 (S=1/50) …… 6 自動車車庫建設に伴う立会調査</p> <p>第5図 土層柱状図 (S=1/50) …… 7</p> <p>第6図 調査地位位置図 (S=1/6,000) …… 7 農家住宅増築に伴う立会調査</p> <p>第7図 土層断面図 (S=1/60) …… 8</p> <p>第8図 調査地位位置図 (S=1/6,000) …… 8 自動車整備工場増築に伴う試掘調査</p> <p>第9図 調査地位位置図 (S=1/6,000) …… 9</p> <p>第10図 トレンチ配置図 (S=1/1,000) …… 10</p> <p>第11図 土層柱状図 (S=1/50) …… 10 老人福祉施設建設に伴う試掘調査</p> <p>第12図 調査地位位置図 (S=1/10,000) …… 11</p> <p>第13図 トレンチ配置図 (S=1/400) …… 12</p> <p>第14図 土層断面図 (S=1/60) …… 12 一戸建て住宅改築に伴う立会調査</p> <p>第15図 土層断面図 (S=1/60) …… 13</p> <p>第16図 調査地位位置図 (S=1/6,000) …… 13 個人住宅に伴う立会調査</p> <p>第17図 土層断面図 (S=1/50) …… 14</p> <p>第18図 調査地位位置図 (S=1/5,000) …… 14 個人住宅増築に伴う立会調査</p> <p>第19図 土層断面図 (S=1/50) …… 15</p> <p>第20図 調査地位位置図 (S=1/6,000) …… 15 個人住宅新築に伴う立会調査</p> <p>第21図 調査地位位置図 (S=1/5,000) …… 16</p> <p>第22図 土層断面図 (S=1/40) …… 17 共同住宅建設に伴う試掘調査</p> <p>第23図 土層断面図 (S=1/40) …… 18</p> <p>第24図 調査地位位置図 (S=1/5,000) …… 18 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 (7)</p> <p>第25図 狩谷遺跡調査区配置図 (S=1/5,000) …… 19</p> <p>第26図 狩谷遺跡1区遺構配置図 (S=1/300) …… 20</p> <p>第27図 狩谷遺跡2区遺構配置図 (S=1/300) …… 21 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 (8)</p> <p>第28図 ヤナ砂遺跡調査区位置図 (S=1/5,000) …… 23</p> <p>第29図 ヤナ砂遺跡遺構平面図 (S=1/150) …… 24</p>	<p>第30図 ヤナ砂遺跡横口式灰窯平・断面図 (S=1/60) …… 25</p> <p>第31図 ヤナ砂遺跡製鉄炉平・断面図 (S=1/30) …… 26 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 (9)</p> <p>第32図 八絛1号墳位置図 (S=1/5,000) …… 28</p> <p>第33図 八絛1号墳石室平面図 (S=1/60) …… 29</p> <p>第34図 八絛1号墳石室・墳丘断面図 (S=1/60) …… 30</p> <p>第35図 八絛1号墳石室床面平面図 (S=1/60) …… 30</p> <p>第36図 八絛1号墳出土遺物 (S=1/4) …… 30 久米大池1号墳測量調査</p> <p>第37図 古墳位置図 (S=1/1,000) …… 32</p> <p>第38図 久米大池1号墳表塚輪軸 (S=1/4) …… 34</p> <p>第39図 久米大池1号墳測量図 (S=1/500) …… 35 東総社中原本線改良工事に伴う発掘調査</p> <p>第40図 調査区位置図 (S=1/5,000) …… 37 駅南区画整理事業に伴う発掘調査</p> <p>第41図 調査地位位置図 (S=1/5,000) …… 38 吉備路観光センターの計画変更に伴う発掘調査</p> <p>第42図 調査地位位置図 (S=1/5,000) …… 40</p> <p>第43図 遺構配置図 (S=1/200) …… 41</p> <p>第44図 西壁断面図 (S=1/60) …… 41 作山古墳現状変更に伴う立会調査</p> <p>第45図 調査地位位置図 (S=1/50,000) …… 42</p> <p>第46図 円筒埴輪出土位置図 (S=1/5,000) …… 43</p> <p>第47図 円筒埴輪出土位置図 (S=1/1,000) …… 43</p> <p>第48図 円筒埴輪出土状況平・断面図 (S=1/40) …… 43</p> <p>第49図 北壁断面図 (S=1/60) …… 44</p> <p>第50図 埴輪列の埴輪1 (S=1/4) …… 45</p> <p>第51図 埴輪列の埴輪2 (S=1/4) …… 46</p> <p>第52図 埴輪列の埴輪3 (S=1/4) …… 47</p> <p>第53図 埴輪列の埴輪4 (S=1/4) …… 48</p> <p>第54図 出土埴輪1 (S=1/4) …… 49</p> <p>第55図 出土埴輪2 (S=1/4) …… 50 岡山自動車(株)総社営業所新築工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査</p> <p>第56図 調査地位位置図 (S=1/5,000) …… 55</p> <p>第57図 遺構配置図 (S=1/300) …… 56</p> <p>第58図 東壁断面図 (S=1/60) …… 57 平成14年度鬼ノ城発掘調査概要</p> <p>第59図 調査地位位置図 (S=1/8,000) …… 59</p> <p>第60図 第3区状区間平面図 (S=1/200) …… 60</p> <p>第61図 西門イメージ図 …… 63</p>
--	--

## 図 版 目 次

<p>共同住宅建設に伴う試掘調査</p> <p>第1図版 T-1断面 (東から) …… 6</p> <p>第2図版 T-2断面 (北から) …… 6</p>	<p>自動車車庫建設に伴う立会調査</p> <p>第3図版 土層断面 (西から) …… 7 農家住宅増築に伴う立会調査</p>
--	---

第4図版 土層断面(南から) …………… 8	第22図版 八柱1号墳石室全景(西から) …………… 31
自動車整備工場増築に伴う試掘調査	第23図版 八柱1号墳墳丘盛土 …………… 31
第5図版 T-1土層断面(南から) …………… 10	久米大池1号墳測量調査
第6図版 T-4土層断面(南から) …………… 10	第24図版 久米大池1号墳遠景(西阿曾から) …………… 36
老人福祉施設建設に伴う試掘調査	第25図版 古墳全景(北西から) …………… 36
第7図版 T-1土層断面(南から) …………… 12	第26図版 久米大池1号墳円部(前方部から) …………… 36
第8図版 T-4土層断面(南から) …………… 12	第27図版 箱式石棺墓石(西から) …………… 36
第9図版 T-3土層断面(南から) …………… 12	駅南区画整理事業に伴う発掘調査
一戸建て住宅改築に伴う立会調査	第28図版 区画道15号線完掘状況 …………… 39
第10図版 土層断面(東から) …………… 13	第29図版 区画道15号線出土製炭窯 …………… 39
個人住宅に伴う立会調査	第30図版 区画道6号進入路2区出土骨罎器 …………… 39
第11図版 土層断面(西から) …………… 14	第31図版 石原4区完掘状況 …………… 39
個人住宅増築に伴う立会調査	吉備路観光センターの計画変更に伴う発掘調査
第12図版 土層断面(北から) …………… 15	第32図版 調査地遠景(東から) …………… 41
個人住宅新築に伴う立会調査	第33図版 調査地全景 …………… 41
第13図版 造成地全景(北から) …………… 17	第34図版 段状遺構完掘状況 …………… 41
第14図版 土層断面(東から) …………… 17	作山古墳現状変更に伴う立会調査
共同住宅建設に伴う試掘調査	第35図版 埴輪列検出状況(南西から) …………… 51
第15図版 土層断面(南から) …………… 18	第36図版 埴輪列検出状況(南から) …………… 51
山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(7)	第37図版 埴輪列半截状況(南東から) …………… 51
第16図版 狩谷遺跡1区全景(南から) …………… 22	第38図版 埴輪列完掘状況(南から) …………… 51
第17図版 狩谷遺跡2区全景(南から) …………… 22	岡山日産自動車(株)総社営業所新築工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査
山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(8)	第39図版 調査地全景(北西から) …………… 57
第18図版 ヤナ砂遺跡調査地遠景(南から) …………… 27	第40図版 遺構完掘状況(南から) …………… 57
第19図版 ヤナ砂遺跡横口式炭窯・製鉄炉(南から) …………… 27	第41図版 土壌-4断面遺物出土状況 …………… 57
山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(9)	第42図版 溝状遺構-2遺物出土状況 …………… 57
第20図版 八柱1号墳石室全景(南から) …………… 31	
第21図版 八柱1号墳石室内敷石 …………… 31	

## 表 目 次

表-1 平成14年度立会・確認・発掘調査一覧表 …… 2

## 1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

## 平成14年度文化財行政の概要

本市に於ける文化財行政は教育委員会文化課文化財係が担当しており、埋蔵文化財をはじめとした一般文化財の調査・保護・啓発を行っている。

### 〔組織〕

教育長	栗田 交三	主 事	笹田 健一（庶務・文献担当）
教育次長	丸山 光男	臨時職員	福田有美子
文化課長	加藤 信二		
文化財係長	谷山 雅彦		（埋蔵文化財学習の館）
主 査	武田 恭彰（調査担当）	館 長	村上 幸雄
主 査	平井 典子（調査担当）	臨時職員	近藤 雅子
主 任	前角 和夫（調査担当）	臨時職員	田中 富子
主 事	高橋 進一（調査担当）		
主 事	松尾 洋平（調査担当）		

### 〔埋蔵文化財〕

平成14年度の埋蔵文化財の記録保存に伴う発掘調査は、公共事業では緊縮財政を反映して社会資本の整備に係わる開発行為が継続事業以外の新規事業については減少傾向にある。

民間の開発事業についても、依然として続く景気の低迷を反映して大規模な開発は鳴りを潜める一方、ある程度堅調な個人消費に対応した住宅・店舗等の小規模な開発は一定の水準で推移しており、立会・確認調査の大半はこれらに対応したものである。

平成14年度に総社市教育委員会が実施した発掘調査の具体的な内訳は、公共事業では県営ほ場整備事業に伴うもの3件、市道・区画整理に伴うもの2件、観光施設に伴うもの1件である。

民間の開発に伴う発掘調査は店舗開設に伴うもの、個人住宅に伴うもの各1件である。

この他に鬼ノ城の復元整備事業に伴い、城壁線の不明箇所に対する遺構確認調査を実施した。

### 〔文化財保護・啓蒙〕

指定史跡の下列り清掃は例年の通りに、鬼城山・経山城・作山古墳・宮山墳墓群・栢寺廃寺・江崎古墳・秦原廃寺について実施した。

鬼城山環境整備事業については、3回の整備委員会を開催し、城壁線確認調査の成果の検討と西門復元を始めとする整備事業について協議を行い、14年度はその協議に基づき45mの範囲で土塁復元、高石垣修復のための解体工事を開始した。また、西門復元のための建築財の購入も開始し、部材の検査等の本格的な復元工事開始に向けた準備に着手した。

埋蔵文化財の発掘調査報告書は、2003年3月に「三須地区県営農業基盤整備事業に伴う発掘調査三須河原遺跡他」〔総社市埋蔵文化財発掘調査報告16〕を刊行した。

この他、全国遺跡環境整備会議と、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会に職員を派遣して研修を行った。

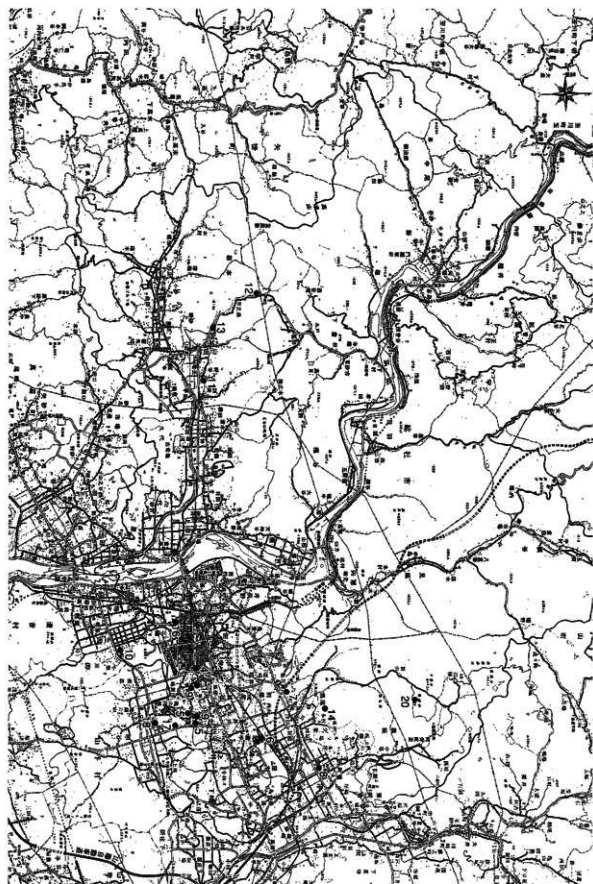
（武田恭彰）



表1 平成14年度立会・確認・発掘調査一覧表

地図番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査種別	調査期間	調査所見	報告頁
		井出1208-2	病院増築	確認調査	4月15～16日	遺構・遺物なし	
		井出早清576-5	確認調査	確認調査	10月7日	遺構・遺物なし	
		真壁1342-1他	宅地造成工事	立会調査	11月6日	遺構・遺物なし	
		門田1304他	基礎工事	立会調査	11月7日	遺構・遺物なし	
		総社1丁目250-5	宅地造成工事	立会調査	12月5日	遺構・遺物なし	
		井出484	地盤改良工事	立会調査	12月6日	遺構・遺物なし	
		井出1150-3他	基礎工事	立会調査	12月24・25日	遺構・遺物なし	
		北清手305-1	基礎工事	立会調査	1月18日	住居址?	
		真壁1034	下水道引き込み工事	立会調査	2月27日	遺構・遺物なし	
		北清手366	浄化槽埋設工事	立会調査	3月3日	遺構・遺物なし	
1		井手早清576-5	共同住宅建設	試掘調査	10月7日	遺構・遺物なし	5
2		富原860-5	車庫建設	立会調査	1月9日	遺構・遺物なし	7
3	深町遺跡	北清手国府殿田 305-1,304-2	住宅増築	立会調査	1月20日、 3月25日	遺構・遺物なし	8
4		総社二丁目621-1	自動車整備工場増築	試掘調査	1月24日、 2月5日	柱穴、溝、土壌	9
5		三須1222-1	老人福祉施設建設	試掘調査	1月31日	遺構・遺物なし	11

地図 番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査種別	調査期間	調査所見	報告頁
6		北溝手400.402	住宅改築	立会調査	2月10日	土壌・柱穴	13
7		刑部鮫尾438-1	住宅建設	立会調査	2月13日	遺構・遺物なし	14
8		西阿曾1337-1	住宅増築	立会調査	3月10日	遺構・遺物なし	15
9		井手西延503-3	住宅建設	立会調査	3月19日	土壌	16
10		三輪中阿高141-2	住宅建設	試掘調査	3月24日	遺構・遺物なし	18
11	狩谷遺跡	山田	県営ほ場整備	発掘調査	4月1日～10月8日 12月8日～2月4日	本文参照	19
12	ヤナ砂遺跡	山田	県営ほ場整備	発掘調査	6月12日 ～7月8日	本文参照	23
13	八柱1号墳	山田	県営ほ場整備	発掘調査	12月1日～26日	本文参照	28
14	久米大池1号墳	久米		測量調査	2月17日 ～3月17日	本文参照	32
15	中所遺跡	三須	市道建設	発掘調査	4月2日 ～7月24日	本文参照	37
16	真壁遺跡	真壁・三輪	区画整理	発掘調査	4月19日～003年 4月21日	本文参照	38
17	天満遺跡	三須825-1	観光センター建設	発掘調査	10月23日～25日	本文参照	40
18	作山古墳	三須		立会調査	11月11日～15日	本文参照	42
19	井出才ノ前遺跡	井出1035	店舗建設	発掘調査	11月19日 ～12月5日	本文参照	55
20	鬼ノ城	真坂1762-1	史跡整備	確認調査	4月18日 ～9月10日	本文参照	59



第1図 立会・確認発掘調査位置図 (S=1/10,000)

## 2. 立会及び確認調査の概要

## 共同住宅建設に伴う試掘調査

所在地 井手字早溝576-5

調査期間 平成14(2002)年10月7日

調査面積 約10㎡

### 調査概要

総社市街地東部に位置する井手に、共同住宅建設が計画された。建設予定地の西約100mには総社東中学校が所在するが、ここではパソコン教室を建設する際に遺跡が発見され埋蔵文化財発掘調査が実施されている<sup>(1)</sup>。早溝遺跡と命名され、溝敷条が確認されたのみで、遺構密度は低く集落のはずれと考えられるが、建設予定地まで遺跡が広がる可能性もあったため、試掘調査を行ない、遺構が確認された場合は発掘調査を実施することとした。

調査地は既に宅地化されており、西半に建物を、東半に駐車場を造る予定となっていたため、建物部分に重機によって4箇所のトレンチを掘削した。各トレンチはほぼ同様の状況で、1m近い造成土直下には耕作土が残存しており、その下層にはグライ化した粘質土層及び粘土層が確認された。また、T-3からは、炭化物や有機物が出土したので、トレンチを広げ遺構の屑を検出したが、その過程で埋土中から近世以降の陶磁器片が出土したことから新しい擾乱と判明した。

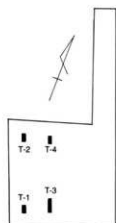
以上、調査の結果、建設予定地は低湿地であったことが確認された。

(平井)

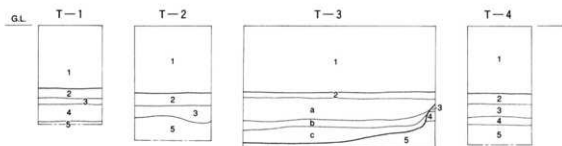
註 武田崇彰 1994「早溝遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』3



第2図 調査地区位置図 (S=1/6,000)



第3図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)



1. 造成土 (真砂土)    2. 暗褐色土 (表土)    3. 灰色砂質土  
 4. 暗青色粘土    5. 灰茶色粘土  
 攪乱  
 a. 暗灰色土    b. 暗青色粘土    c. 暗黒褐色土: 炭・有機物多

第4図 土層断面図 (S=1/50)



第1図版 T-1断面 (東から)



第2図版 T-2断面 (北から)

## 自動車車庫（消防防災格納庫）建設に伴う立会調査

所在地 富原860-5

調査期間 平成15（2003）年1月9日

### 調査概要

高梁川右岸から約300m西に位置する富原に、消防自動車等の格納庫が建設されることになった。それに伴って格納庫の下に防火水槽の設置も計画され、約4m程度の深さまで掘削が及ぶことになった。

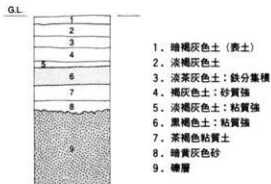
周辺は水田や果樹園が営まれているが、遺跡の発見はなく、高梁川の氾濫原あるいは後背湿地の可能性が高かったが、この付近の堆積状況を把握するため立会調査を行なった。

調査の結果、表土下の2～4層は色調が淡く砂質の強い土層である。5層は色調はやや淡いものの粘質が強くなり、6層に至っては有機物が多く含まれていたと考えられる黒褐色の粘質土が堆積する。7層も粘質の強い層であるが、8層からは砂層となり、その下層には厚く礫が堆積する。

以上堆積土層から、高梁川の氾濫原であったこの地が、次第に後背湿地となっていく状況が窺われ、遺構・遺物は全く発見できなかった。（平井）



第3図版 土層断面（西から）



第5図 土層柱状図（S=1/50）



第6図 調査地位置図（S=1/6,000）

## 農家住宅増築に伴う立会調査

遺跡名 深町遺跡

所在地 北溝手字国府殿田305番1, 304番2

調査期間 平成15(2003)年1月20日・3月25日

調査概要

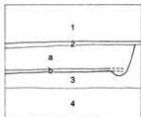
増築予定地は、JR吉備線服部駅から約300m南方に位置し、遺跡の範囲外とされてはいるものの北側には弥生土器の散布地である深町遺跡が所在する。

増築箇所の基礎は、地盤強化のため部分的に幅約1m・深さ約1.5m程度掘削するというもので、併せて浄化槽の設置も計画されていた。深町遺跡に近接すること、国府を劈断させる小字名をもつこと、また、古くからの集落内に位置することなどから、遺跡が存在する可能性は極めて高いため工法の変更も協議したが、既に発注済みで近日中に工事に掛かることから立会調査を実施することとなった。

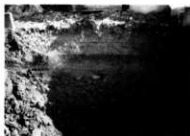
調査の結果、約60cmの造成土直下に近世以降の水田層が堆積し、その下層はいわゆる基盤層と考えられる黄茶褐色粘質土層、黄茶褐色砂質土層と続く。黄茶褐色粘質土層を切り込んで、住居址、土城、柱穴等の遺構が検出され、図示には堪えなかったが土器の小片から弥生時代後期の所産と考えられた。

調査の結果、国府に関連するような遺構・遺物は認められなかったが、深町遺跡が当該地及びさらに南にまで広がることが判明した。 (平井)

G.L.



1. 造成土
  2. 淡褐色土：軟質（旧水田層）
  3. 黄茶褐色粘質土
  4. 黄茶褐色砂質土
- 住居址
- a. 暗褐色粘質土：黄褐色土小ブロック少・炭床面の一部に堆積（覆土）
- b. 黄茶褐色粘質土：暗褐色土ブロック含む（貼床）



第7図 土層断面図 (S=1/60)

第4図版 土層断面 (南から)



第8図 調査地位置図 (S=1/6,000)



## 自動車整備工場増築に伴う試掘調査

所在地 総社二丁目字鳥形後621番1, 667番1

調査期間 平成15(2003)年1月24日, 2月5日

### 調査概要

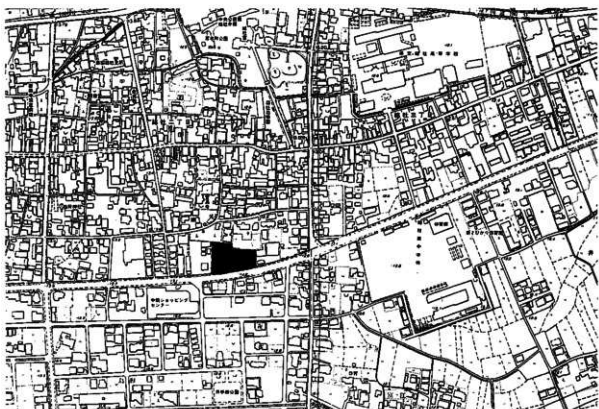
総社駅から約1.5km, 一般市道中央井手本線に北面する三菱自動車営業所が、整備工場を増築するとの建築確認申請が上がってきた。工事による地下への影響を尋ねたところ、4箇所に径1mのパイルを2.5mの深さまで打ち込むとのことであった。

周辺では遺跡は確認されていなかったが、もし遺跡が存在した場合、パイルの打ち込みによって遺構・遺物が破壊されてしまう恐れがあるため、工事の際パイルを打ち込む箇所を事前に掘削してもらい、遺構の有無を確認することとした。調査は、既存建物との関係から一度にパイルを打つことができず、2度にわたって実施した。

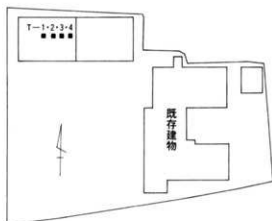
調査の結果、約1.1mの造成土下には現代水田層と床土が存在し、その下層4層は近世以降と思われる水田層となる。5層は暗茶灰色、6層は茶灰色のいずれも粘質の強い土が堆積するが、7層は砂質の強い褐色土となる。

遺構は5層上面から切り込んでおり、溝と柱穴、および土塼と考えられる遺構が確認された。溝と考えられる遺構の底面には、鉄分やマンガンが沈着している。埋土上層からは弥生時代後期の高坏等も出土しているが、小片のため図示しえなかった。

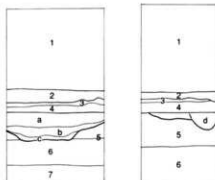
遺構が確認されたことから、今後の周辺の開発には十分な注意を払っていきたい。(平井)



第9図 調査地区位置図 (S=1/6,000)



第10図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)



1. 造成土
2. 暗青灰色土 (現代水田層)
3. 褐灰色土：砂質強 (床土)
4. 淡灰褐色土：上層と下層に1cm程度鉄分集積 (旧水田層)
5. 暗茶灰色土：粘質強
6. 茶灰色土：粘質強
7. 褐灰色土：砂質強

- 溝
- a. 褐灰色砂質土：炭・土器含む
  - b. 暗褐灰色土
  - c. 淡灰褐色土：下層に鉄分・マンガン集積  
土壌?及びピット
  - d. 暗褐灰色土

第11図 土層柱状図 (S=1/50)



第5図版 T-1土層断面 (南から)



第6図版 T-4土層断面 (南から)

## 老人福祉施設建設に伴う試掘調査

所在地 三須1222-1

調査期間 平成15(2003)年1月31日

調査面積 約8㎡

### 調査概要

総社市街地の東方、国道429号線から約50m西に入った三須の地に、老人福祉施設の建設が計画された。建設予定地周辺では、国道429号線拡幅工事や東総社中原本線改良事業、およびほ場整備に伴う発掘調査が実施されて、弥生時代以降の遺跡の存在が明らかになった<sup>(4)</sup>。中には官衙、寺院関連の遺構も発見されていることから、古代においては特に重要な地域と考えられる。

建物基礎工事は、地盤が弱いことから杭打ちを行なう予定であった。建設予定地はやや低くなっており、南北に走る旧河道の縁辺にあたるが、旧河道の形成時期が明らかでないため、周辺の状況から遺跡が広がる可能性も否定できないことや、微高地縁辺部に遺物の廃棄がみられる可能性もあることから試掘調査を実施し、遺構・遺物が検出された場合は杭打箇所および周辺を調査することとした。

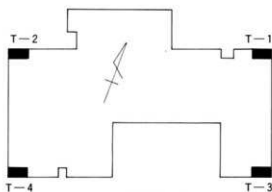
試掘調査は4ヶ所のトレンチを設定し、重機により掘削を行なった。

T-2は湧水のため詳細な観察は不可能であったが、他のトレンチはいずれも同様の堆積状況が認められた。1m余りの造成土下には、耕作土(2層)と床土(3層)が残存する。その下層には2層の粘土層(4・5層)、さらに下層6・7層は砂層となっており、遺構・遺物は皆無であった。土層の堆積状況等から建設予定地周辺は低位部であったと考えられる。(平井)

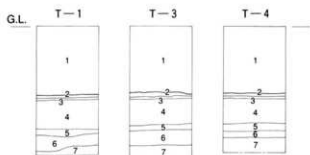
註 平井典子「共同住宅建設に伴う発掘調査—井手村後遺跡—」『総社市埋蔵文化財調査年報』6 1996年  
物部茂樹他「三須河原遺跡・三須畠田遺跡・井手見延遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』156 2001年  
平井典子「総社市中原本線改良事業に伴う発掘調査(三須地区)」『総社市埋蔵文化財調査年報』10-12 2001-2003年  
武田恭彰「三須河原遺跡・三須畠田遺跡・三須美濃田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査報告』16 2003年



第12図 調査地区位置図 (S=1/10,000)



第13図 トレンチ配置図 (S=1/400)



1. 造成土
2. 淡青灰色粘質土 (現代水田層)
3. 明茶色粘質土 (床土)
4. 暗褐色土
5. 暗灰色粘土: 暗灰色砂ブロック含
6. 暗灰色粗砂
7. 淡灰茶色砂

第14図 土層断面図 (S=1/60)



第7図版 T-1土層断面 (南から)



第8図版 T-4土層断面 (南から)



第9図版 T-3土層断面 (南から)

## 一戸建て住宅改築に伴う立会調査

所在地 北溝手400, 402-3

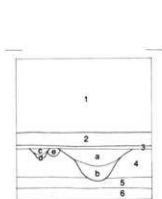
調査期間 平成15 (2003) 年2月10日

### 調査概要

改築予定地は総社市の東部、JR服部駅から南西約50mの地点に位置し、遺跡の範囲外になってはいるものの近接して西に弥生土器の散布地である深町遺跡が所在する。

改築工事においては、ベタ基礎工法のため掘削は造成土内でおさまるが、浄化槽の設置に伴い掘削が地下深くまでおよびため立会調査を実施した。

その結果、微高地が確認され、弥生時代の土器小片と共に土塊、柱穴と思われる遺構が検出された。遺構は4層上面から切り込んでおり、浄化槽掘削部を見るかぎりその密度は高いものと考えられることから、深町遺跡の範囲は当該地よりさらに東に広がるものと考えられる。(平井)



第15図 土層断面図 (S=1/60)

1. 造成土
  2. 暗褐色土 (表土)
  3. 赤灰色砂質土：鉄分含む (旧水田層)
  4. 赤褐色土：鉄分集積
  5. 暗茶灰色微砂粘質土
  6. 暗灰色シルト
- 土塊or溝
- a. 褐色土：粘質強
  - b. 灰褐色土：粘質強
- 土塊?
- c. 暗灰褐色土：粘質強
  - d. 暗茶灰色土：砂質強
- ビット
- e. 暗褐色土



第16図版 土層断面 (東から)



第17図 調査地位置図 (S=1/6,000)

## 個人住宅に伴う立会調査

所在地 刑部字鯉尾438-1

調査期間 平成15(2003)年2月13日

### 調査概要

総社市東部、中山古墳群が立地する丘陵の南裾に個人住宅が建設されることとなった。建設予定地は既に造成されており、建物自体はベタ基礎のため造成土内で掘削はおさまるが、公共下水道が敷設されていないことから、浄化槽の設置が予定されていた。

周囲の水田からは、土器片等の遺物は発見されていないが、予定地に隣接して古墳群が存在することから、丘陵裾部に当該期の集落が広がる可能性もあり、浄化槽掘削時立会調査を実施することとした。

調査の結果、約1mの造成土直下には、表土層が残されており、表土層の下は粘質土層と砂質土層が互層になって、下層の9・10層から粘土層に変わる。粘質土には風化花崗岩の石粒が含まれる。以上、山土起源の堆積状況が確認され、遺構・遺物の存在は認められなかった。(平井)



第17図 土層断面図 (S=1/50)



第11図版 土層断面 (西から)



第18図 調査地位置図 (S=1/5,000)

## 個人住宅増築に伴う立会調査

所在地 阿曾1337-7, 1338-7, 1338-8

調査期間 平成15(2003)年3月10日

### 調査概要

市内東北部、田圃に囲まれた西阿曾集落の一角に、個人住宅の増築が計画された。建物自体はベタ基礎で掘削は造成土内でおさまるが、浄化槽を設置するため掘削時立会調査を実施した。

湧水と壁面の崩落により良好な記録写真を撮ることや詳細な観察はできなかったが、調査の結果1m弱の造成土の下は造成前の耕作土がみられ、さらに下層は25cm程度の砂質土層、約60cmの粗砂層、そして粘質土層と続いていることから低位部と考えられた。また遺構・遺物も全く検出できなかった。

西阿曾付近は、開発の手が伸びず、遺跡の破壊は免れているが、古墳以外の遺跡の有無については不明な部分が多い。埋蔵文化財保護のためにも、今後このような個人住宅の立会調査等から遺跡の分布を明らかにしていきたい。

(平井)



第12図版 土層断面(北から)



第19図 土層断面図(S=1/50)



第20図 調査地位置図(S=1/6,000)

## 個人住宅新築に伴う立会調査

所在地 井手字西延503番3

調査期間 平成15(2003)年3月19日

### 調査概要

建設予定地は、総社駅から東へ約2.3kmの地点にあたり、駅前から東西に走る一般市道中央井手本線の300m南に位置する。この付近は都市計画区域となっており、近年水田を造成し個人住宅の建設が進んでいる。

建設予定地の南約50mでは、東総社中原本線の建設が行なわれており、事前の発掘調査において弥生時代～中世にいたる遺構が確認されていることから、当該地にも遺跡が存在する可能性は高いものと考えられた。

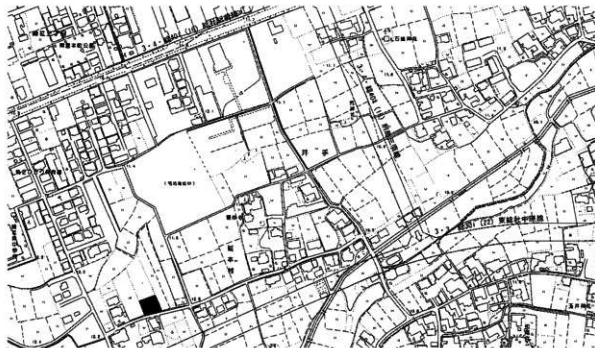
基礎工事はベタ基礎工法で、地盤改良は予定されていなかったが、公共下水道が完備されていないため浄化槽を設置するとのことであった。建物の基礎部分における掘削は造成土内でおさまるが、浄化槽は地下2m程度まで掘削することから、浄化槽掘削時に立会調査を実施することとした。

立会調査の結果、造成土の下には耕作土がみられ、その下層は20cm程度の旧水田層となる。旧水田層の直下には、茶褐色粘質土の自然堆積層がみられ、遺構がこの層を切り込んで存在することが確認された。遺構の密度は低く、東壁で土城が1基検出されたにすぎない。

土城からは炭・焼土に伴って土器も1点出土した。胴部の小片で図示しえないが、胎土・色調から弥生時代後期後半～古墳時代の所産と考えられる。

当該地は、広く造成が行なわれていることから、漸次家屋が建築されていくことと思われるが、基礎部分の地盤改良を広範囲に行なう場合は発掘調査が必要となるため、今後の建築確認申請に留意していきたい。

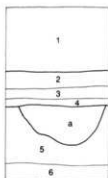
(平井)



第21図 調査地位置図 (S=1/5,000)



GL



1. 造成土
  2. 暗灰色土 (表土)
  3. 淡褐色土 (旧水田層)
  4. 淡黄茶色粘土 (旧水田層)
  5. 茶褐色粘質土
  6. 淡灰茶色砂質土
- 土壌  
a. 茶配色粘質土 (土壤埋土)

第22図 土層断面図 (S=1/40)



第13図版 造成地全景 (北から)



第14図版 土層断面 (東から)

## 共同住宅建設に伴う試掘調査

所在地 三輪字中阿高141-2

調査期間 平成15(2003)年3月24日

### 調査概要

個人住宅建設予定地は、総社市の南、清音村との境界に近い三輪丘陵西側の田園地帯に位置する。建物の基礎部分はベタ基礎工法で掘削は深く及ばないが、浄化槽が設置される予定となっていた。

当該地より西の地域は、かつては場整備事業に伴う確認調査が実施され、調査者によると建設予定地の西側付近には河道が南北に走っており、さらに西には微高地が形成され、遺跡の存在も確認されたとのことである。

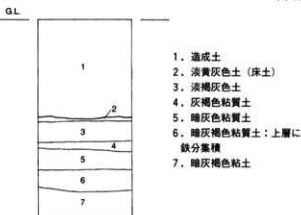
建設予定地においては、河道部分に近いことから、遺構が検出される可能性は少なかったが、堆積状況を確認するため浄化槽掘削時に立会調査を実施することとした。

調査の結果、約1mの造成土直下に耕作土の床土と考えられる5cm程度の層がみられ、それより下層はすべて粘質土および粘土等の粘性の強い層となっている。このことから当該地およびその周辺地域にはかつて低湿地が広がっていたことが推察される。

(平井)



第15図版 土層断面 (南から)



第23図 土層断面図 (S=1/40)



第24図 調査地位置図 (S=1/5,000)

### 3. 発掘調査概要

## 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 (7)

遺跡名 狩谷遺跡

所在地 総社市山田

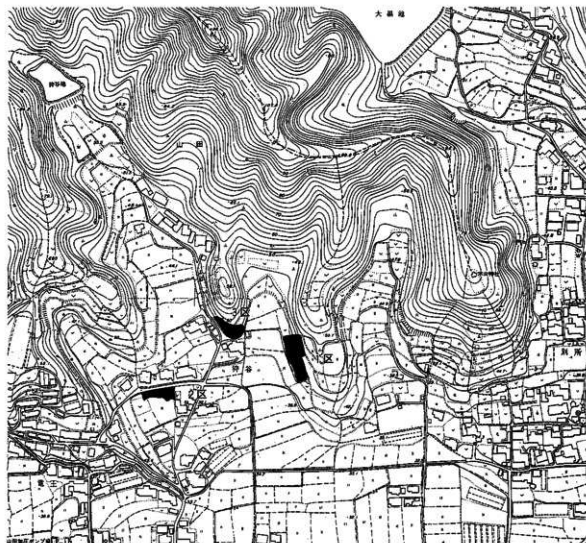
調査期間 2002年4月1日～10月8日、12月8日～2003年2月4日

調査面積 4,200㎡

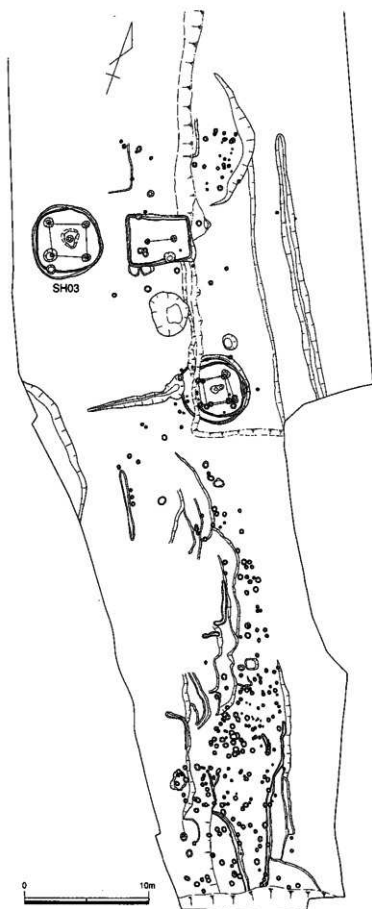
### 調査概要

今年度の山田地区ほ場整備事業の対象となった狩谷地区は、久代地区に隣接する山田地区東端に位置し、南に伸びる枝状の低い丘陵に挟まれた裾部の緩斜面と、谷部の狭小な水田が主として開発の対象となった。狩谷地区の現在の景観は比較的平坦な水田と宅地であるが、重機による確認調査の結果、平坦部の大半は小規模な埋積谷の低湿地を近世以降に造成して改変したものであることが判明した。このため、旧地形から推定して遺跡は現在は畑となっている浸食の進んだ丘陵裾部の緩斜面にしか立地しないと考えられ、従来の山田地区での調査の知見と同様であることが明らかとなった。

発掘調査は、前年度の末に行った掘削対象地での重機による確認調査の結果を受けて、遺跡の範囲を確定した後、関係機関との協議を行い工法上保存が不可能な地点については記録保存の処置をとる



第25図 狩谷遺跡調査区配置図 (S=1/5,000)



第26図 狩谷遺跡1区遺構配置図 (S=1/300)

こととして、3ヵ所の調査区(第25図)を設定し順次調査に着手した。

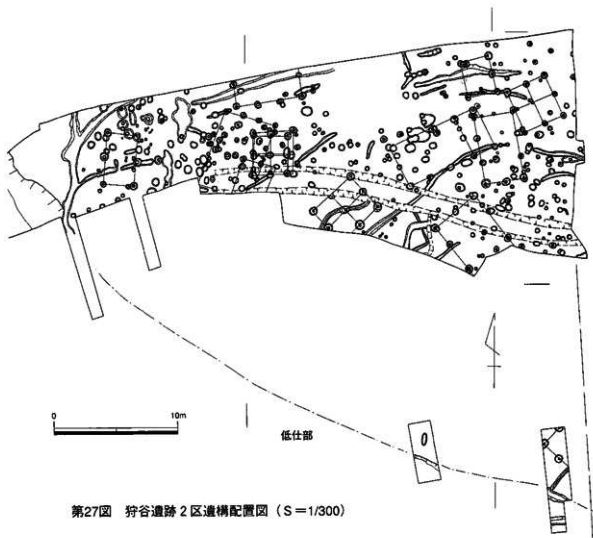
1区(第26図)は、細長く南に伸びる低い丘陵の西向き緩斜面で確認された遺構面の内、掘削の対象となった部分に設定した。調査前のこの丘陵は裾部から頂部まで畑として利用されており、確認調査の所見から近世以降の造成による地形の改変が著しいことが予想されたため、重機を用いて表土と造成土を除去し包含層の上面まで掘り下げた。

遺構は削平された箇所では基盤層で検出できたが、削平を逃れた部分では調査区上方に存在したであろう遺構から流れ落ちた弥生時代～中世の遺物包含層が、50cm～1m以上の厚さで堆積していた。また、部分的に斜面堆積状に出土する遺物も多いため人力で精査しながら掘り下げ下げ、遺構検出を行った。

確認された遺構は、古代後期～中世の柱穴多数と段状遺構、古墳時代初頭の住居址1軒と土塋・柱穴・溝、弥生時代後期の住居址2軒と段状遺構・土塋等である。

この内、弥生時代後期のSH03は、後世の削平をまったく受けておらず、山側の壁が高さ140cm以上残存するほど非常に良好な遺存状況を呈し、斜面に構築された住居の本来の規模を推定させる良好な資料を得た。

また、厚く堆積した包含層の状態と調査区外の踏査結果から推定して、現在は開墾により地形は改変されているが、この低丘陵全体に同様の在り方で遺構が広がるのは確実に考えられる。



第27図 狩谷遺跡 2区遺構配置図 (S=1/300)

2区(第27図)は1区から谷を挟んだ西側低丘陵の先端部に位置し、三方向を低湿地に囲まれた約80m四方の平坦面に遺構が広がる状況が確認された。

遺構は水田表土と鋤床層を重機で除去し、土器・焼土・炭を含む薄い包含層を人力で掘り下げ、基盤土上で検出を行った。

確認された遺構は柱穴・溝であるが、柱穴は直径50cm以下で平面形態が円形を呈するものが大半で、比較的規模の大きい柱穴断面には柱痕跡が確認できる例も多い。

柱穴の位置、規模・埋土から推定して復元できた建物は12棟であるが、さらに検討を加えれば増える可能性はある。建物の配置に特別な規則性はみられないが、建物主軸の方位はほぼ方位に合わせたものと、方位よりむしろ地形に適應したものに大別され、この点は時期的な差と考えるのが妥当であろう。

遺構に伴う遺物の量は少ないが、ほぼ8世紀～9世紀の須恵器・土師器と少量の緑釉陶器が出土しており、建物群の変遷もこの時期幅の中で考えたい。

以上の調査から得られた知見から考えられる遺跡の性格であるが、遺跡全体からみれば南西端のほぼ六分の一を調査したのみで断定するにはやや躊躇するが、建物の規模・配置や水田として利用されていた低湿地との境に明確な区画溝が存在しない点等を考慮すると宮衙である可能性は低い。

しかしながら、総柱の倉庫や緑釉陶器からみれば単なる農村集落ではなく、自然発生的な集落のな

かの公的施設、もしくは富豪層の居宅の一端と考えることもできよう。

この問題については、本遺跡も含まれる古代の行政単位である「田上郷」内で、8～9世紀の官衙的な集落の調査例が比較的多く蓄積されており、それらの報告書中で検討していく予定である。

3区（第25区）は1区の西隣に派生する低丘陵先端部にあたる。調査前は雑木林であったが、付近の住人から古墳らしい石材が存在したとの情報があり、雑木の伐採後に人力で確認調査を実施したところ、遺構を確認できたため全面調査を行った。

遺構としては、東側斜面で1区と同様の中世の段状遺構一か所が検出された他、西側の急斜面で地山を段状に整形した後に版築状に細かい土を積み上げた部分を確認された。この土積みについては人為的な遺構である点は確実ながら、今回の調査区内で時期と性格を窺わせる知見は得られなかった。

（武田恭彰）



第16図版 狩谷遺跡1区全景（南から）



第17図版 狩谷遺跡2区全景（南から）

## 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 (8)

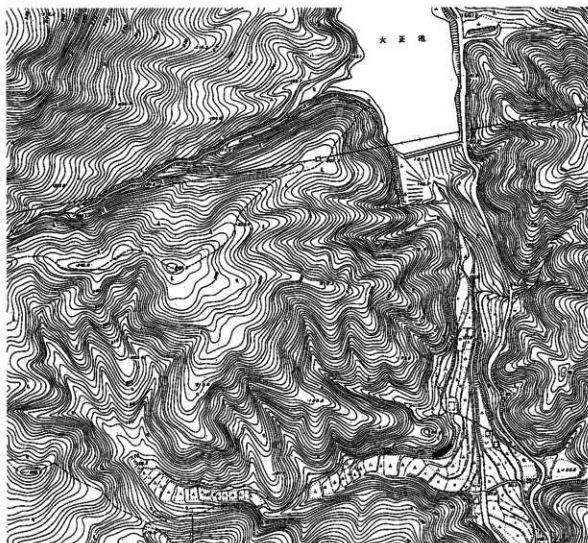
遺跡名 ヤナ砂遺跡  
所在地 総社市山田  
調査期間 2002年6月12日～7月8日  
調査面積 456㎡  
調査概要

ヤナ砂遺跡は砂子遺跡から山田川沿いに1kmほど逆上った急峻な谷間に所在し、眼下に山田川と小谷の合流点を望む南向きの急斜面に遺構が確認された。遺跡が所在する地区は当初、平成14年度の工事計画には含まれていなかったが、追加工事として計画が浮上した。

工事対象となったヤナ砂地区は、現在は耕作を放棄された急峻な谷間の小規模な水田であるが、周囲から鉄滓等の出土が地元住民には知られていることから、重機を用いて確認調査を行った。

この結果、掘削対象地の急斜面で焼土と鉄滓が確認されたため、事業課と協議を行ったが工法的に盛土が不可能なため急遽、符谷遺跡の調査と平行して発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、重機で耕作土の除去を行った後に人力で掘り下げて遺構の検出を行った。

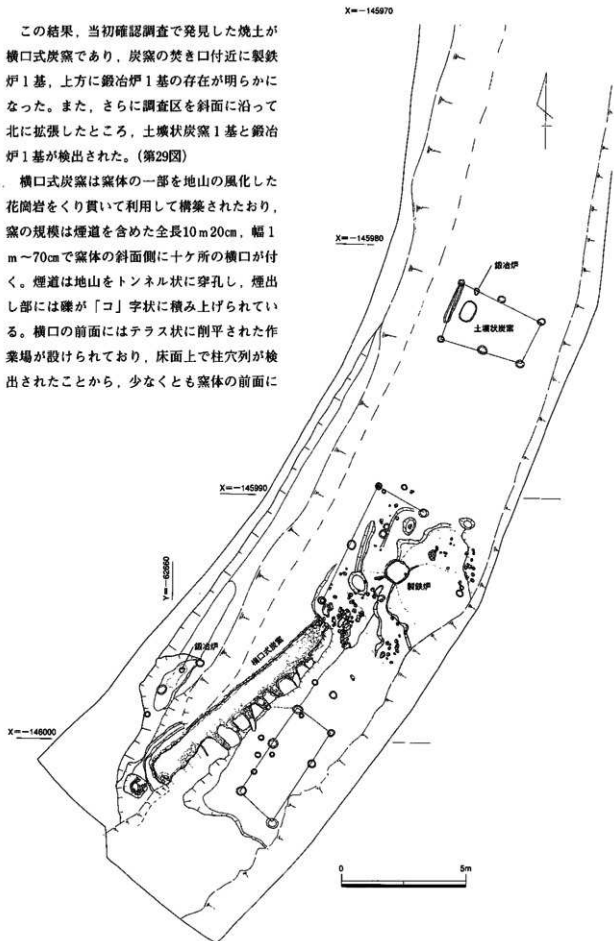


第28図 ヤナ砂遺跡調査地位位置図 (S=1/5,000)

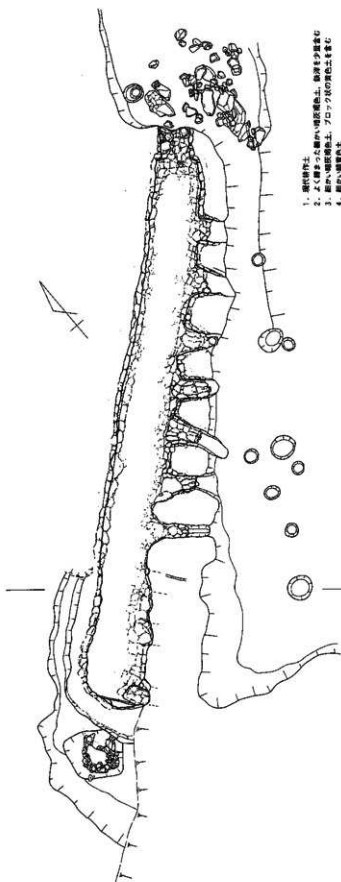


この結果、当初確認調査で発見した焼土が横口式炭窯であり、炭窯の焚き口付近に製鉄炉1基、上方に鍛冶炉1基の存在が明らかになった。また、さらに調査区を斜面に沿って北に拡張したところ、土壇状炭窯1基と鍛冶炉1基が検出された。(第29図)

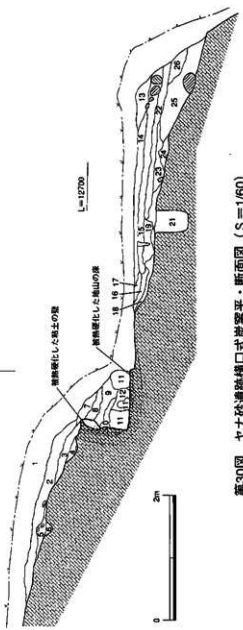
横口式炭窯は窯体の一部を地山の風化した花崗岩をくり貫いて利用して構築されたおり、窯の規模は煙道を含めた全長10m20cm、幅1m~70cmで窯体の斜面側に十ヶ所の横口が付く。煙道は地山をトンネル状に穿孔し、煙出し部には礫が「コ」字状に積み上げられている。横口の前面にはテラス状に削平された作業場が設けられており、床面上で柱穴列が検出されたことから、少なくとも窯体の前面に



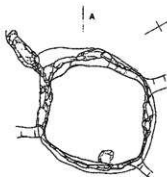
第29図 ヤナ砂遺跡遺構平面図 (S=1/150)



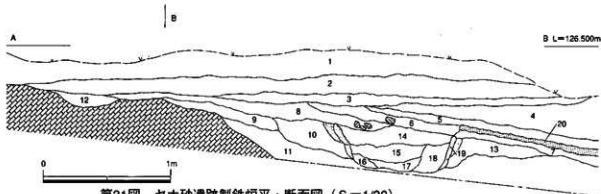
1. 腐植層土
2. よく腐まった層の暗褐色土、砂質を少量含む
3. 層の暗褐色土、ブロック状の腐植土を含む
4. 層の暗褐色土
5. 層の暗褐色土、砂質・粘土・炭を含む
6. 層の暗褐色土
7. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む
8. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む (8-12は腐植層土)
9. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む
10. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む
11. 暗い褐色土、粘土質を多く含む
12. 暗い褐色土、粘土質を多く含む
13. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む
14. よく腐まった腐植土
15. 腐植土
16. 腐植土
17. 腐植土
18. 腐植土
19. よく腐まった腐植土、粘土質を多く含む
20. よく腐まった腐植土、粘土質を多く含む
21. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む
22. 暗褐色土、粘土質を多く含む
23. 暗褐色土、粘土質を多く含む
24. 層の暗褐色土、粘土質を多く含む
25. よく腐まった腐植土
26. よく腐まった腐植土



第30図 ヤナ砂通降槽口式遊樂平・断面図 (S=1/60)



1. 現代耕作土
2. 現代耕作土、鉄分沈殿
3. 現代耕作土、マンガン沈殿・腐葉層
4. 細かい暗褐色土（水田造成土）
5. 暗灰褐色土、焼土・炭を含む
6. よく踏まった細かい暗褐色土、焼土・炭を含む
7. 跡の残らない暗灰褐色土
8. 深い暗灰褐色土、炭・鉄滓を含む
9. 深い暗灰褐色土、黄色土を多く含む
10. 細かい暗灰褐色土（製鉄炉造成土）
11. 深い暗灰褐色土、炭を多く含む（製鉄炉造成土）
12. 細かい暗灰褐色土（清濁土）
13. 細かい暗灰褐色土、炭を含む（製鉄炉造成土）
14. 細かい炭層、木炭片・焼土を多く含む（14～18は製鉄炉下層土壌層土）
15. 細かい黒灰色土、木炭片・焼土を含む
16. 暗灰褐色土、焼土粒・黄色土粒を含む
17. 細かい黒灰色土、木炭片を多く含む
18. 暗灰褐色土、焼土粒を多く含む
19. 固く踏み踏まった暗土層
20. よく踏み踏まった暗褐色土層（跡り保存層）



第31図 ヤナ砂遺跡製鉄炉平・断面図 (S=1/30)

は上屋が掛けられていた可能性が高い。

また、焚口の周囲には閉塞材として用いられたと考えられる被熱赤化した板状の石材が散乱しており、窯体の土層断面にみられる人為的に破壊されたような天井等の焼土塊の堆積状況も、従来の同様の遺構の調査所見と同じ状態を呈している。

この横口式炭窯の焚口に近接して検出された製鉄炉（第31図）は、土層からみると炭窯と同時、若しくは若干後出の時期に操業していたと考えられ、炭窯の焚口付近の平坦面を一部利用するかたちで斜面を造成し粘土を貼った作業面が設けられている。製鉄炉は下部構造の土塊と、斜面に平行してその両側に広がる鉄滓と焼土・炭を多く含む排滓溝が遺存している。土塊の規模は深さ35cm、一辺80cm四方の隅丸方形で周囲の壁には粘土が貼られており、内部に敷かれた粉状の炭がよく残っている。

この製鉄炉の周囲からも柱穴が検出されたことから、炭窯と同様に上屋が存在したと考えられる。

この他に炭窯の上方の段状遺構で、周囲に鉄滓が散布しよく焼けた地山面を検出し鍛冶炉と判断したが、鉄滓に混じって鉄鉱石が出土したことから他の性格の遺構である可能性もある。

また、製鉄炉の北約10mで、砂子遺跡で多数確認された土塊状炭窯1基と鍛冶炉も検出され、やはり上屋とみられる柱穴に囲まれている。

以上が調査を実施した遺構の概要であるが、これらの遺構の時期として、規模・構造が6世紀末葉～7世紀の製鉄遺跡の調査例に酷似している点から、調査当初はほぼその時期と考えていた。

しかしながら、横口式炭窯から掻き出された炭や製鉄炉の排滓中から、14世紀前半の土師器碗や鍋が攪乱や混じり込みとは考えられない状態で出土したことから、これらの製鉄遺構の操業時期が中世であることが確実となった。

この調査結果は横口式炭窯や製鉄炉の規模・構造や、鉄鉱石の使用等の点で従来の製鉄遺跡の研究成果と大きく異なるため局地的な特異な例であるとの意見もある。しかし、現時点では県内で確実に

中世前期と考えられる製鉄遺跡の調査例は無いため、本例が特異であるのか、この地域では普遍的な例かを比較検討はできない。ただ、近接する下流域の砂子遺跡の4区で、鍛造薄片が30kg以上採集された12世紀末葉の鍛冶炉が確認され、大溝を挟んだA区では大量の青白磁が出土した同時期の大規模な建物群も発見された。また、砂子遺跡とヤナ砂遺跡の間の山田川沿いの急峻な谷間には、時期は不明ながら随所で鉄滓の散布が確認されることから、時期が下るにつれて場所を上流に移動させながら連続と操業を続けたと考えるならば、ヤナ砂遺跡を特異な例ではなくこの地域の普遍的な鉄生産形態の流れの中で理解することもできる。

この場合、遺構からみたヤナ砂遺跡の操業形態が古墳時代から殆ど変化していない点が問題となるが、製鉄炉は未確認ながら、6～7世紀の鉾石の加工から鉄器製作の鍛冶がまで一貫した遺構が発見された砂子遺跡の製鉄集団の存在が重要である。

即ちこの製鉄集団が鉄鉾石を使用するという前提での鉄生産技術に於いては改良の必要がない完成した技術を持っていたと仮定するならば、その技術が同じ鉾石を原料とする以上この地域で連続と受け継がれたと考えるほうが自然であり、より実態に近いであろう。

以上のヤナ砂遺跡の評価については、本報告の中で県南部の製鉄遺跡全てを網羅した時期的・地域的な比較・検討をさらに加えた後に再度、言及したいと考えているが、その場合により多角的な視点での検討が必要であることを改めて認識させる遺跡であると思われる。

(武田)



第18図版 ヤナ砂遺跡調査地遠景(南から)



第19図版 ヤナ砂遺跡横口式炭窯・製鉄炉(南から)

## 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査 (9)

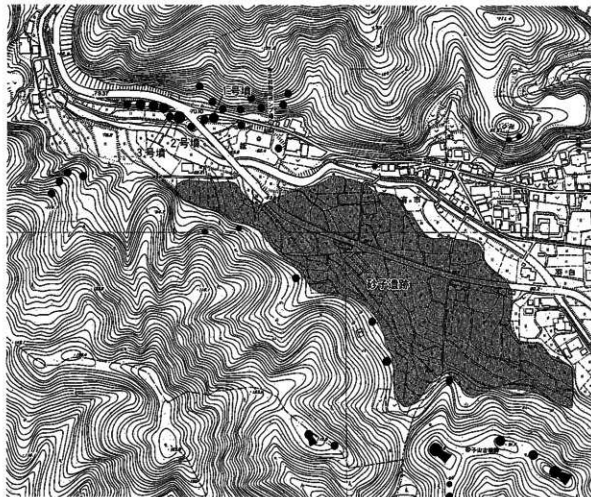
遺跡名 八紘1号墳  
所在地 総社市山田  
調査期間 2002年12月1日～26日  
調査面積 30㎡  
調査概要

八紘1号墳は、山田川を挟んで対岸に砂子遺跡に臨む急峻な南向き斜面に所在する。本古墳が構成する八紘古墳群の現在の景観は、県道や市道により分断されているが、本来は狭い斜面に消滅したものも含めると30基以上の古墳が周溝を按ずるように構築されていたとみられる。

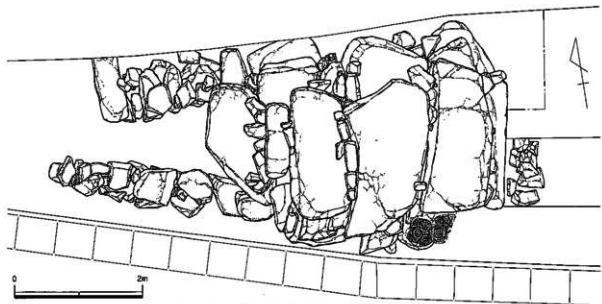
本古墳の存在は未確認であり、当初の調査予定にはなかったが、ほ場整備事業に伴うファームpond（配水池）の建設に伴い市道法面の民有地を掘削中、ヤナ砂遺跡の調査のため現場付近を通行中の担当者が露呈した石室を確認したことによりその存在が明らかになった。

発見時の古墳は、斜面に主軸を平行させた西向きの横穴式石室の側壁が露出した状態であり、石室の大半が市道の法面から道路の下に埋没していると予想された。

このことを受けて、市教委ではただちに事業主体である県振興局と遺跡の保存について協議を行い、現状以上の法面の掘削は行わないことで合意した。しかしながら、墳丘盛土が除去され一部の石材が



第32図 八紘1号墳位置図 (S=1/5,000)



第33図 八紘1号墳石室平面図 (S=1/60)

重機で動かされたことにより石室が非常に不安定な状態にあり、最悪の場合に倒壊した石室が施設を損壊するのみならず市道が大きく陥没する可能性が地元住民と市道を管理する市土木課から指摘された。このため市教委では、石室を安定した状態で固定する方法を提案したが、原因者である県振興局が経費の点で難色を示したことから、止むを得ず市教委が発掘調査を実施して記録保存の処置をとることとなった。

発掘調査は狩谷遺跡の調査と平行して行い、人力で堆積土を除去して石室の検出を行ったが、予想に反して石室の遺存状況は良好で、大半の天井石が残っている他、山側の側壁も土圧によりやや内傾しているがほぼ当初の高さが残存していた。横穴式石室は全長6.5mの片袖式で、羨道部の長さ3.3m、幅1.1~1.3m、玄室の長さ3.2m、幅1.8~2.2m、高さ2mを測り、羨道部・玄室は開口部に向けてやや狭まる平面形態を呈している。また、羨道部の天井石は1石が残るのみであるが、天井面の玄室と羨道の境界は1m以上の明瞭な段差をつけて3枚の玄室天井石が据えられており、奥壁は1枚の扁平な石材を立てられている。玄室と羨道の境界付近の床面上には、高さ1m程度に閉塞石が積まれていたが、積石中から平安期の土師器が出土した点からみて大半の石材は後世に攪乱されている。

玄室の床面には二面の敷石が確認され、一次埋葬面の小礫が敷かれた床面と遺物を覆うように敷かれた小型の板状石材で構成される二次埋葬面(第35図)が検出された。

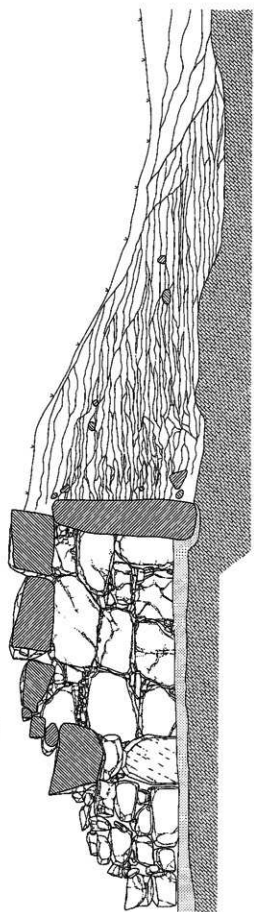
また玄室から羨道開口部にかけては、一次埋葬面に伴う石壘付きの排水溝が設けられている。

出土遺物は大半が須恵器の坏Hで坏Gは含まれておらず、主として一次埋葬面の奥壁際で重なる出土した他、玄室と羨道の境界付近の土床面上からも出土した。

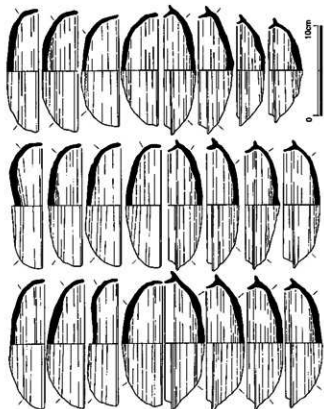
墳丘盛土は大半が流失しているため、石室背後の道路法面で断面を確認したのみで墳丘の形態は不明であるが、羨道開口部から墳端まで約14mを測る。奥壁の高さまで遺存する墳丘盛土は、石室に近い部分は灰を含む真砂土と荒い砂質土を細かい互層状に非常に固く突き固めている。(第34図)

本古墳の築造年代は、出土した須恵器からみるとほぼ7世紀初頭にあり、追葬も前半の範疇に収まるとみられるが、詳細については15年度に調査を実施した2・3号墳と連続した構築時期が考えられるためと併せて近刊予定の本報告中で検討したい。

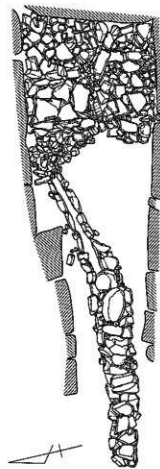
(武田)



第34图 八墓1号墳石室・墳丘断面図 (S=1/60)



第35图 八墓1号墳石室床面平面図 (S=1/60)



第36图 八墓1号墳出土遺物 (S=1/4)



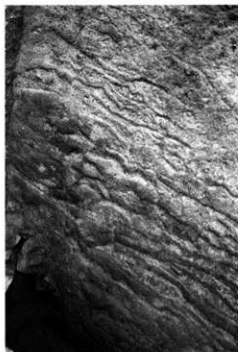
第20図版 八紘1号墳石室全景 (南から)



第21図版 八紘1号墳石室内敷石



第22図版 八紘1号墳石室全景 (西から)



第23図版 八紘1号墳墳丘盛土



## 久米大池1号墳(御灰山古墳)測量調査

所在地 久米

調査期間 平成15(2003)年2月17日～3月17日

### 調査概要

平成13(2001)年4月2日、総社市北東部に位置する久米大池沿岸でタバコの火の不始末から火災が発生し、火は久米大池の北山林に燃え広がり、山林約61haを焼き尽くした後、4月5日ようやく鎮火された。

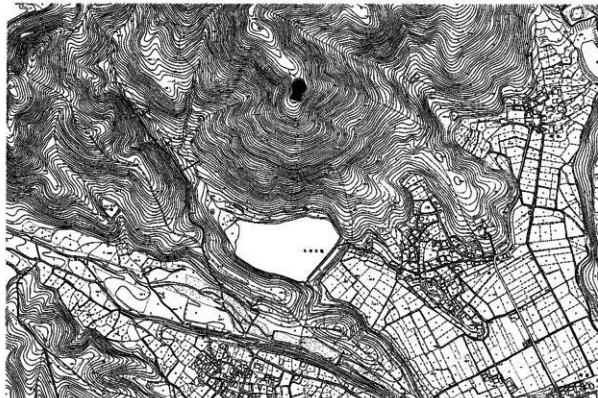
焼け跡の通称御灰山から、未確認の前方後円墳が発見された。場所は砂川が平野部に流れ出る付近の北側山塊で、久米大池に北面した御灰山尾根上先端標高約160mの地点に位置し、総社平野が一望できる眺望に恵まれた立地をもつ。総社市北東部においては大形の前方後円墳で、盗掘は受けているものの、墳丘の遺存状況も良好なことから測量調査を実施することとした。

測量調査は1/100の縮尺・25cmコンタで実施し、平井典子、松尾洋平が常時、調査作業員の小野良介、アルバイトの大畑隆広・樋上善文が交代でこれにあたった。

なお調査・整理にあたって、葛原克人氏、村上幸雄氏から様々なご指導・ご教示を賜り、とりわけ葛原氏には問題点の指摘から校正までお世話になった。また草原孝典氏には遺物についてご教示を賜った。記して感謝の意を表します。

測量の結果、墳長約55m、後円部の径約39m・高さ約9m、前方部の長さ約26m・幅約27m・高さ約7mと、前方部が短い形状をもつもので、総社市北東部においては最大級の前方後円墳となった。

墳丘は、幅の狭い尾根の平坦部を最大限利用して築かれ、後円部の背後を切断して自然地形から画し、堀割状になって、その深い部位で平坦面を作出し墳端に接する。一方の前方部側は、前面に広い



第37図 古墳位置図 (S=1/1,000)

テラスを設けている。二段築成で、前方部の段は後円部ほど明瞭ではない。造出は東方にのみ認められ、前方部よりに位置するが、単なる流土の堆積とみる異説もある。2段目斜面は10cm～60cm程度の角礫を用いた葺石で覆われ、総じて30cmを超えるような大き目の石が使用されている。1段目斜面には転石と思われる石は散見されるが、雨水により地山が露出した箇所周辺でも葺石は確認できないことから、流土で埋もれているのではなく当初から1段目斜面には葺石を敷設しなかったものと考えられる。また、東側の前方部頂との境は、葺石の遺存状態が極めて良好で、端部のラインが明瞭に観察できる。

後円部頂部には2箇所の乱掘墳がみられ、そのうち西側のものは盗掘墳である。火災跡の植林で居合わせた地元の古老から、かつては石室の蓋石がのぞいていたとの話を聞き、落ち葉を掻き分けてみると蓋石の一部が出現した。後円部の中心から外れる位置関係や、規模が小さいことから中心主体は別に存在するものと考えられるが、少なくとも埋葬施設の1つは主軸を東西にもつ箱式石棺であることが明らかになった。写真を撮り位置を記した後、再び落ち葉によって覆い隠し人目に触れないようにしたが、蓋石の隙間から内部を覗いたところ土砂の堆積はほとんどなく、遺物等は既に持ち去られたものと考えられる。東側の浅く細長い乱掘墳は、植林の関係で掘削されたものらしい。なお後円頂部を取り巻く葺石のレベルに比べ、内部のレベルは盗掘孔付近の掘り返した土を除外してもなお50cm程度高く、後円頂部に方形槽など何らかの施設が築かれていた可能性も考えられる。

前方部は、西南部分がやや崩れており、等高線が乱れている。また、頂部には、大きく深い盗掘墳が穿たれている。

#### 出土埴輪

久米大池1号墳から採集された埴輪のうち図示する17点を第38図に示した。いずれも表面が剥落し調整は不明瞭である。

1～4は造出から表採したものである。1は円筒埴輪の口縁部付近の破片で、タガは幅が狭く高い。タガの下方には円形の透し孔が一部残存する。表面のほとんどは薄く剥落しているが、残存した器面から、外面は細かなヨコハケ、内面はヨコ及びバナメ方向の断続的な細かいハケメを施したことが看取できる。2、3は円筒埴輪の胴部片と考えられるが、器面が荒れ調整は不明である。4は朝顔形埴輪の口縁部付近の破片と考えられるが、これも器表が薄く剥落しており調整は不明である。

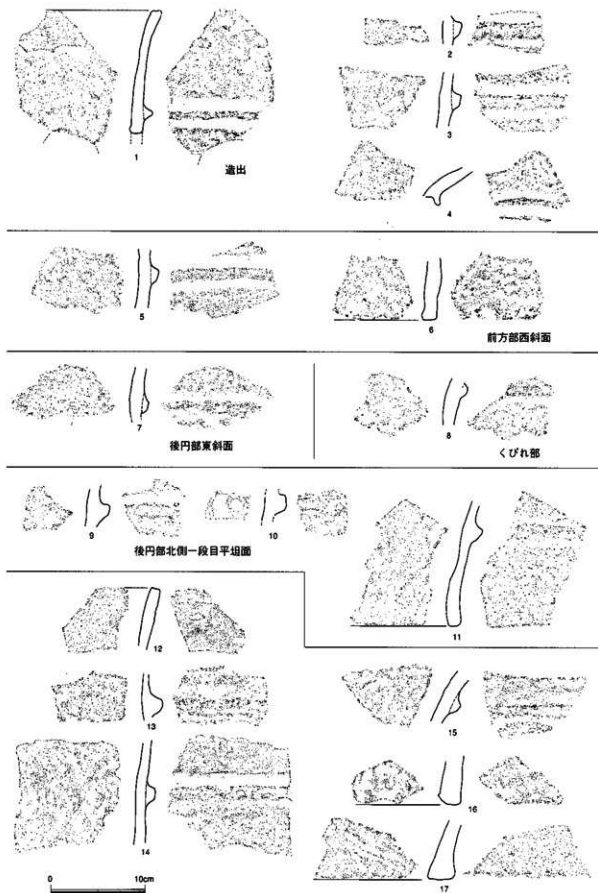
5～6は、前方部西斜面から表採されており、5は円筒埴輪の胴部片と思われるが、タガはやや幅広く低い。調整は不明瞭であるが、内面は工具によるナデと考えられる。基底部の破片6も外面調整は不明であるが、内面はオサエ、ナデ、底部には圧痕がみられる。

後円部東斜面から出土した7は、胴部の破片である。調整は不明瞭であるが、外面のタガ上方に細かいタテハケが若干みとめられる。タガは不整形で、偏平である。

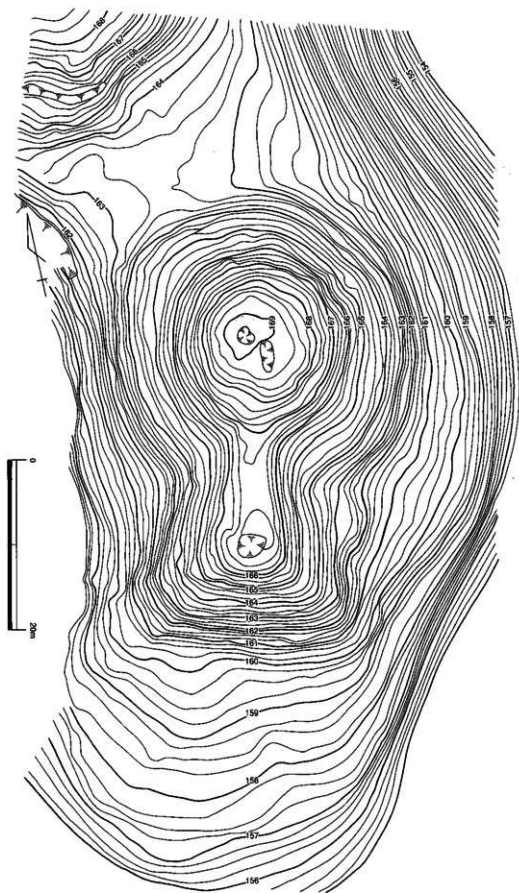
くびれ部付近から採集された8は、器面が荒れ調整は不明である。タガの突出度は低く不整形である。

9～11は、後円部北側の一段目平坦面からの表採品である。9、10は円筒埴輪胴部片で、10の内面ナデ調整が確認された以外、調整は不明である。1段目のタガを含む基底部の破片11は、器面が荒れているものの、タテハケらしき痕跡が若干みられるが二次調整の有無は不明である。内面には工具によると考えられるナデが観察できる。また底面には圧痕が認められる。

12～17は墳丘西斜面表採品である。12は円筒埴輪の口縁部で、外面にはやや細かいヨコハケがみられるが、タガが剥がれたような痕跡があり、その剥離面には細かいタテハケがみとめられる。このこ



第38図 久米大池1号墳表採埴輪 (S=1/4)



第39図 久米大池1号墳測量図 (S=1/500)

とから、タテハケ後ヨコハケを施したものと思われる。13～15は胴部片で、14は、内外面同一工具による細かいハケメが観察でき、外面はヨコハケ、内面はナナメ方向のハケメである。13、15は調整不明である。16、17は基底部の破片で、いずれも外面の調整は不明であるが、内面は工具によるナデと考えられ、底面には圧痕が残存する。

図示したものを含む表採埴輪のすべてにおいて、黒斑はみとめられないことから、窯窯焼成の可能性が高い。また、いずれも表面が薄く剥落しており、調整がほとんど残存していないことや、タガの形状等も若干変形していると思われることなど遺存状況は考悪ではあるが、タガの形状が台形とはいいがたい不整形で偏平なものが多く見られることなどから川西編年<sup>註1)</sup>のⅣ期末～Ⅴ期初頭、前方後円墳編年<sup>註2)</sup>の7期末～8期初頭にあたると考えられる。

久米大池1号墳は、一見するとその形態は古い様相を呈し、前方部と後部部の比高差も2m以上を測るが、埴輪からは概ね5世紀末の年代が与えられ、宿寺山古墳の直後あるいはそれに近い時期に築かれたものと考えられる。

久米大池1号墳は、総社平野ほぼ中央部の北側山塊上南端に位置し、総社平野を取り巻く前方後円墳の中では他に比べ100mを凌ぐ高所に位置する。そのため三須丘陵の南側を除く総社平野のほとんどから仰ぎ見ることができ、換言すれば、三須丘陵によって阻まれる宿寺山古墳以外の当時に築かれていた前方後円墳のほとんどを見おろすことのできる位置に立地していたといえる。このことおよび総社平野北部における最大級の前方後円墳であることから、巨大古墳築造後の古備の首長墓のあり方を考える上で重要な位置付けができる古墳と思われる。

註1. 円筒埴輪の調整・時期等は、川西論文に準ずる。川西宏幸1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号

註2. 広瀬和雄 1991「第3章 前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』

葛原克人 1991「第8章 備中」『前方後円墳集成 中国・四国編』



第24図版 久米大池1号墳遠景（西阿曾から）



第25図版 古墳全景（北西から）



第26図版 久米大池1号墳円部（前方部から）



第27図版 箱式石棺蓋石（西から）

## 東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）

遺跡名 中所遺跡4区・5区・6区  
所在地 三須中所  
調査期間 平成14（2002）年4月2日～7月24日  
調査面積 1,500㎡  
調査概要

平成10（1999）年度からの継続事業である東総社中原本線改良事業に伴う今年度の発掘調査は、まず三須地区：中所遺跡3区の西隣にあたる中所遺跡4区から着手し、次いで5区、6区の調査後、しばらく調査を中断して、稲の刈入れ後延地区に入り、終了後三須地区：中所遺跡2区の西側を調査する予定であったが、諸般の事情から、中所遺跡2区の西側は来年度に実施するよう変更された。よって、今年度三須地区の発掘調査はすべて終了する予定であったが、西の一部を残すことになった。

### 中所遺跡4区

調査区は、後世の擾乱を大きく受け、遺構は大規模に破壊されていた。かろうじて破壊を免れた箇所では、弥生時代から中世にわたる遺構が検出された。中所遺跡3区と比べ遺構密度は高くなり、住居址、柱穴、土壌、溝等数十基が確認された。

弥生時代の遺構としては、柱穴、土壌、溝等が検出されたが、遺物は総じて少ない。

古墳時代の遺構としては、住居址、柱穴、土壌が確認された。住居址は擾乱によって破壊されており、南端がわずかに残存するのみであったが、出土物から古墳時代前期のものと同判した。

また、中世の遺構は少なく、そのほとんどが柱穴である。

（平井）

### 中所遺跡5区・6区

5区は、中央部以外は大きく擾乱をうけていたが、中世の溝・建物等が検出された。6区では、三須庵寺の寺域区画溝の可能性の高い溝の端部が幅約2m、長さ約10m程度にわたって検出された。

（高橋）



第40図 調査区位置図 (S=1/5,000)

## 駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 真壁遺跡群  
所在地 総社市真壁・三輪地内  
調査期間 2002年4月19日～2003年4月21日  
調査面積 約3,000㎡  
調査概要

### (調査経緯)

総社駅南部地域を対象とする区画整理事業に伴う2002年度の発掘調査は、例年と同じく工事工程に合わせながらの調査となったため、地点を変えながら複雑な調査工程となった。

はじめに区画道32・48号線、次いで区画道6号進入路2区、区画道19号線、区画道15号線、区画道27号線、荒神ヶ市遺跡、石原4区の順で調査を行った。

### (調査概要)

#### 区画道32・48号線

遺構の検出面が標高13.8mと比較的高く、微高地上に形成された遺跡であると推定される。検出された遺構は、柱穴約700、溝16、土壌14であり、土壌の中には内面が淡赤褐色に焼けしまっているものも認められた。

#### 区画道6号進入路2区

2001年度に調査した上三本松遺跡の東隣に位置しており、近接する駅南幹線1号道路・総社市立常盤幼稚園建設に伴う発掘調査で明らかになった状況と近似しており、東へ行くにしたがって遺構密度が低くなっていた。検出された遺構は柱穴130程度、溝3、土壌11であり、火葬墓・墓と推定される



第41図 調査位置図 (S=1/5,000)

ものも10基以上検出された。

#### 区画道19号線

2000年度に調査した上三本松遺跡と西三軒屋遺跡のちょうど中間地点に位置している。検出された遺構は、住居址3、土壇3、溝2、柱穴等である。このうち住居址はいずれも全体の1/4以下しか調査することが出来なかったが、6世紀後半に造営された方形の住居址であることが判明した。

#### 区画道15号線・荒神ヶ市遺跡

調査地は大きく3地区に分かれており、地形は西が高く、東に向かって下がっているが、全体としては同一の微高地上から、微高地端部にかけて遺構が分布していることがうかがわれた。検出された遺構は柱穴500以上、住居址10、井戸1、土壇31、溝9である。土壇には鉄器生産に関する製炭窯と考えられるものがあり、覆土中から鉄滓・炉壁片を出土した住居址も5以上あった。特に荒神ヶ市遺跡住一2からは鍛冶がと推定される焼土遺構が検出され、床面覆土を水洗したところ粒状滓・鍛造剥片が採取され、鍛冶を行っていたことが判明した。

#### 区画道27号線

ボックスカルバートの埋設予定地のみ調査であり、若干の柱穴と、溝状の遺構3を検出した。

#### 石原遺跡4区

2000年度に調査した石原遺跡の西隣を、家屋の移転が完了したため発掘調査を実施した。その結果、柱穴約400、土壇16、溝2、住居址2等の遺構が検出された。このうち住居址は弥生時代後期の平面形円形のもの、6世紀後半の平面方形のもの認められた。

(高橋)



第28図版 区画道15号線発掘状況



第29図版 区画道15号線出土製炭窯



第30図版 区画道6号進入路2区出土骨甕器



第31図版 石原4区発掘状況



## 吉備路観光センターの計画変更に伴う発掘調査

遺跡名 天満遺跡

所在地 総社市三須825-1外

調査期間 2002年9月30日・10月23～25日

調査面積 約220㎡

調査概要

(調査経緯)

昭和61年に、吉備路観光及び県南観光の拠点施設として、「観光センター」構想が発足し、1991・1992年度に公有地化が行われている。こうした状況のもと、2003年7月オープンを目指して、1999年度には本体予定地を、2000年度には切土予定地の発掘調査を行った。

調査の結果、本体予定地からは、弥生時代と推定される柱穴・土壇・柵列状の柱穴、数条の溝等が検出された。また、切土部分からは、溝および溝状の遺構、柱穴・土壇のほか鍛冶炉4基が検出されている。

今回の調査は、浄化槽予定地を工事中、岩盤の存在が判明し、掘削が困難となったため計画を変更し、予定地の西側を掘削することになったため、急遽実施することとなった。

(調査概要)

調査地は、三須丘陵の北西端に位置する標高14m弱の低丘陵斜面上で、かつては果樹園として利用されていた。

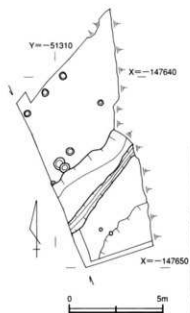
検出された遺構は、調査地北半の低丘陵頂部平坦面で柱穴が認められ、その南側は段状に切られて平坦面がつくりだされており、段状遺構の中に溝状の遺構が認められた。

出土遺物は、須恵器・土師器の小片のみであった。頂部平坦面の覆土中には現代の遺物が散見され、削平を受けていることが判明した。また、段状の遺構の埋土中からも近代の遺物が認められることから、これらの遺構の形成時期は不詳である。

(高橋)



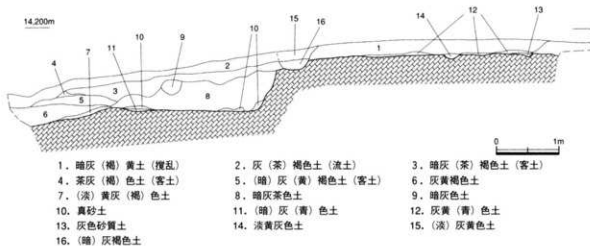
第42図 調査地位置図 (S=1/5,000)



第43図 遺構配置図 (S=1/200)



第32図版 調査地遠景 (東から)



第44図 西壁断面図 (S=1/60)



第33図版 調査地全景



第34図版 段状遺構完掘状況

## 作山古墳現状変更に伴う立会調査

所在地 総社市三須259

調査期間 2002年11月11日～11月15日

### 調査経緯

国指定史跡作山古墳の東南側は、作山古墳の一段目を切り開いて数軒からなる集落が形成されている。そのうちの1つくびれ部付近に位置する個人住宅において、老人在宅介護のため風呂場を広くする必要が生じ、併せて周囲の台所・物置等の改築が予定された。また、宅地背後の切断面が崩落するおそれがあることから擁壁を構築したいとの申し入れがあった。

申請地には、作山古墳の1段目平坦面の端部を高さ1.3～1.5m程度カットして、家屋が建設されている。そのため敷地部分は大きく削平されており、作山古墳に関連する遺構はすべて消失しているものと思われた。1段目平坦面の埴輪列も、地形図でみるかぎり、切断によって消滅している可能性が高いと予測される現状にあった。

また改築箇所も、基礎の掘削はほとんどないことから、仮に何らかの遺構が残存していたとしても、遺構への影響は少ないものと考えられた。

現状変更許可申請を提出し、許可後工事に入った。建物除去後、切断面の土層の検討を行ないつつ、重機による建物のコンクリート床面除去作業に立会していたところ、コンクリートの下から埴輪列が出現した。

急遽、埴輪列を保存すべく計画変更を申し入れたが、埴輪列を避けて建物の北端を南に寄せることは大幅に建築面積を狭くすることになり、既に建築部材の調達がなされていたこともあって、設計変更は不可能と考えられた。また設計変更を行なっても、周囲の状況から良好な状態での保存は困難と思われた。他に方策もなく、やむなく記録保存を行って、埴輪を取り上げることとなった次第である。

切断面および、埴輪列の記録保存後、断面や埴輪列の埴輪を取り上げ、その後工事に入り平成15(2003)年3月31日工事が完了した。

調査は、平井、高橋が担当し、調査作業員小野良介、長岡和美の協力を得た。



第45図 調査地位置図 (S=1/50,000)

また、埴輪の実測・トレースを平井が、遺構のトレースを高橋、埴輪の復元・拓本は両者で行なった。

なお、調査および整理をとおして、葛原克人氏、村上幸雄氏のご指導・ご教示を賜り、とりわけ葛原氏には、問題点の指摘から校正まで大変お世話になった。また草原孝典氏には遺物についてご教示を賜った。記して感謝の意を表します。

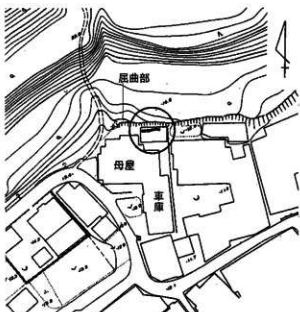
## 調査概要

### 墳丘切断面

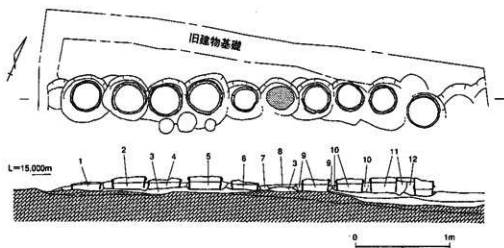
住居の裏側は墳丘を切断した崖になっているため、擁壁を構築する予定となっていたことから、表面の流土を除去し、断面観察を行なった。



第46図 円筒埴輪出土位置図 (S=1/5,000)

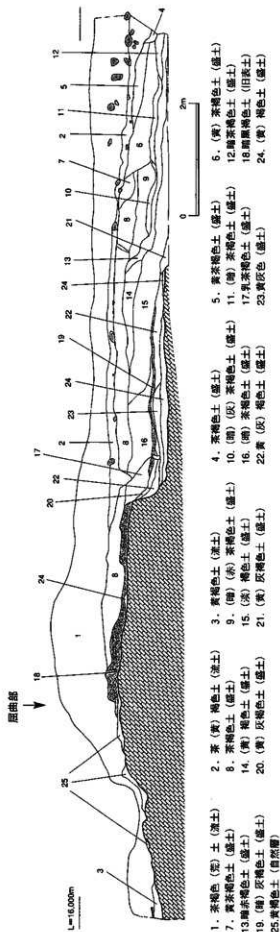


第47図 円筒埴輪出土位置図 (S=1/1,000)



第48図 円筒埴輪出土状況平・断面図 (S=1/40)

1. 淡黄灰褐色土 2. 淡灰黄褐色土 3. (淡) 黄灰褐色土 4. 淡黄灰褐色土 5. 淡黄灰褐色土 6. (淡) 黄灰褐色土 7. 淡黄灰褐色土 8. 淡黄灰褐色土 9. 淡黄灰 (褐) 色土 10. 淡黄灰褐色土 11. 黄灰褐色土 12. 茶黄灰褐色土



第49図 北壁断面図 (S=1/60)

崖線は敷地の西端付近でやや「く」の字状に屈曲しており、屈曲部から西は、地山の直上に流土が堆積しているが、屈曲部付近から東は盛土が残存している。屈曲部東では旧表土と考えられる黒褐色土(18層)が存在し、崖線中央付近ではその旧表土面からほぼ垂直に60cmほど切り込んで、そこから東を平坦に成形している。

成形時期は作山古墳築造以前の可能性もあるが、成形部分の堆積状況や、堆積土層及び周囲から、より古い遺物が出土していないことなどから作山古墳に伴う可能性が高いと思われる。

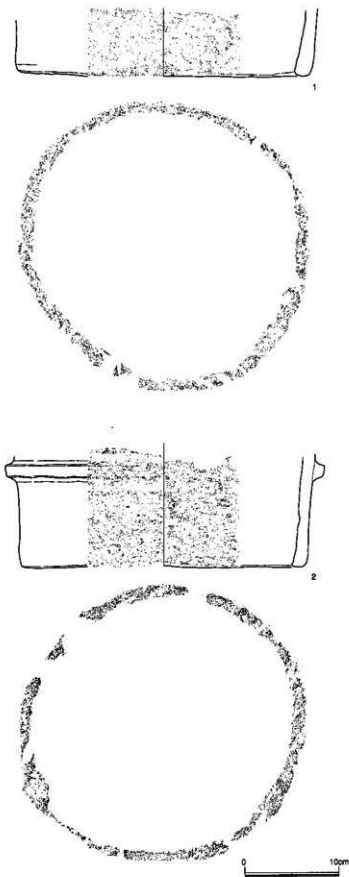
盛土は、成形箇所からまず旧表土層と考えられる18層上面まで順次積み上げ平坦にし、そこからさらに盛土を行なっているが、1層しか確認できず、その上部は厚い流土となっている。なお盛土は総じて細かく突き固められた状況は認められなかった。

作山古墳は、独立丘陵を削りだして造られており、盛土は少ないと考えられていたが、今回の調査により部分的には相当量の盛土がなされていたことが明らかとなった。

#### 壇輪列

壇輪列は、除去された建物の基礎北辺内側に接して確認された。基礎西辺の外側は一段と低くなっておりすでに壇輪は消失していた。

壇輪列では、10本の壇輪の並びが確認されたが、内1本は既に抜き取られており、抜き取り痕跡のみ確認された。その他、壇輪列の両端にも抜き取り痕跡が認められる。各壇輪間は約10cmと密に据えられている。平面観察によると、壇輪の周囲において円形に土質・色調の違いがみられ(第48図)、壇輪を据える際溝を掘って立て並べたのではなく、それぞれ穴を掘り据えたものと想定された。そのため断面の切り合いを観察するため、まず1つ置きに壇輪間と南へL字状にサブトレンチを設けて精査し、次いで壇輪の中心から南をすべて掘り抜き観察した。壇輪間が狭く、埋土も10cm足らずしか残っていないため切



第50図 埴輪列の埴輪1 (S=1/4)

り合いは不明瞭であったが、断面図(第49図)のように若干の違いが認められた。

以上のように断面では明瞭な切り合いは確認できなかったが、埴輪基底部のレベルが一定していないことから、直線的に布掘りをせず、埴輪1本毎に穴を掘り設置したことが首肯できるものと考えられる。

なお、10は並びがややずれていることや、基底部が存在しないことから、後に据え直した可能性が高い。

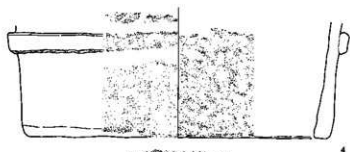
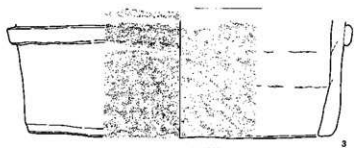
#### 出土埴輪

埴輪は、埴輪列の抜き取りを除いた9点の円筒埴輪をはじめ、切断面や周辺から多数出土している。ほとんどが円筒埴輪で、若干の朝顔形埴輪と、形像埴輪を僅かに含む。

1～10は埴輪列出土のものである。6番目の埴輪は、抜き取られていたため欠番としたが、それ以外のものはほぼ全周が残存する。

1は、基底部径約33cm程度で、基底部から約7cmより上位は欠失している。器面が荒れ外面の調整は不明瞭であるが、一部にタテハケが認められる。内面はナナメ方向に稜がみられ、工具によるナデが施されたものと考えられる。底面には圧痕が残る。

2は、基底部径30cm、第1段タガの上部まで残存している。内・外面共に表面が剥落しており、調整は不明であるが、底面には圧痕が残る。内面には若干凹凸がみられナデが施された可能性が高い。



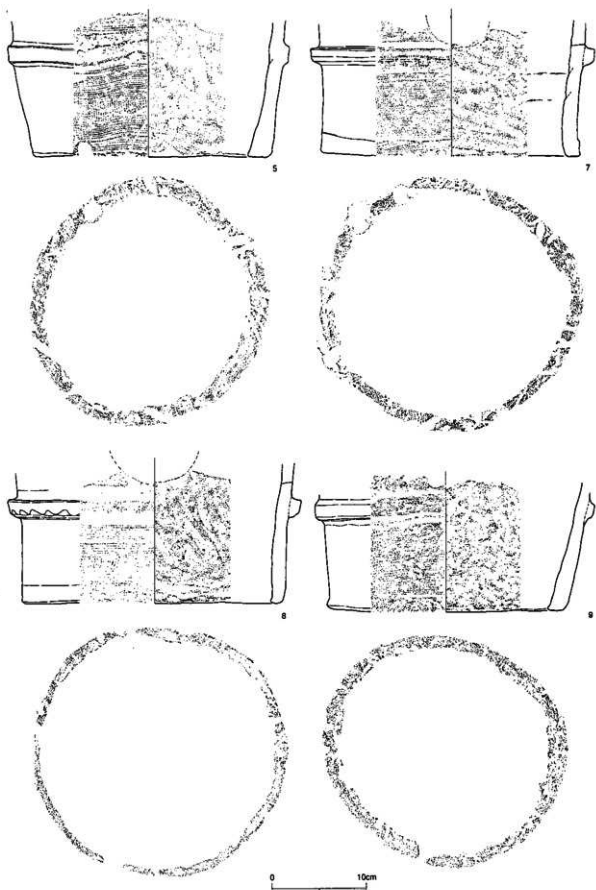
第51図 埴輪列の埴輪2 (S=1/4)

3は、基底部径32cm強、第1段タガの上部まで残存する。タガは押圧技法を施し、偏平で幅が広い。外面は器面が荒れ、調整が不明瞭な箇所が多いが、最下段はタテハケで二次調整は省略されているものとみられる。基底部付近はヨコ方向にナデている。内面は工具によるナナメ・ヨコ方向のナデが施され、接合痕跡も認められる。基底面には圧痕がみられる。また、断面には黒化層が認められる。

4は、基底部径32cmで、第1段タガの上部まで遺存している。タガは押圧技法を施し、下端のオサエが顕著である。外面はタテハケで2次調整のヨコハケを省略し基底部付近のみヨコ方向にナデている。内面は工具による斜め方向のナデを施し、底面は圧痕とナデがみられる。

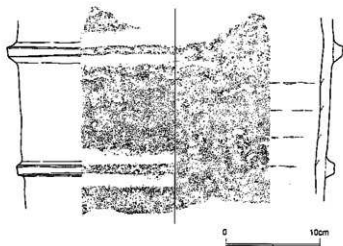
5は、基底部径約25cm、第1段タガ上部まで残存し、タガは低く幅広い台形を呈する。外面はタテハケ後B種ヨコハケを施し、内面はナデ及びタテ・ややナナメ方向のハケメが認められ、基底部付近はオサエ・ナデがみられる。底面には圧痕が残存する。

7は、基底部径27.5cmを測り、第1段タガの上方まで遺存する。外面はタテハケ後、幅約7.4cm程度の工具によるB種ヨコハケを施すが、その工具を止めた痕跡は弱く回数も少ない。内面はナナメ・ヨコ方向のナデ後タテハケを施す。粘土の接合痕跡も看取できる。底面には圧痕とナデがみられる。ま



第52図 埴輪列の埴輪 3 (S=1/4)





第53図 埴輪列の埴輪4 (S=1/4)

た推定後元径約7cm程度の円形の透し孔も残存する。

8は、基底部径27.7cmを測り、第1段タガ上方まで残存する。タガ下端には工具による押圧痕がみられる。外面の調整は、タテハケ後幅約8.1cmの工具によるB種ヨコハケを施し、底部付近にはヨコ方向のナデがみられる。内面は斜め方向のナデを施し、基底部付近はヨコ方向のナデがみられる。底面には圧痕とナデが認められる。また円形の透し孔が残存し、推定径約7cmを測る。

9は、基底部径25cm、第1段タガの上方まで残存する。タガは低く幅広の台形を呈する。外面はタテハケ後ヨコハケを施し、内面は調整が不明瞭であるが、オサエ・ナデ痕跡が認められ、タガ付近より上部は一部にタテハケがみられる。底面には圧痕が残る。

10は、基底部がなく、最大径は33.5cmを測る。タガは台形を呈し2段残存するが、形状から最下段のタガとは考えられない。外面は表面が剥落し、調整不明である。内面も調整不明瞭であるが、ナデが施され一部タテハケと思われる痕跡もみられる。粘土帯の接合痕跡が3cm幅で4条認められる。

11は、切断面の流土中から出土した円筒埴輪の口縁部である。外面は細かいタテハケ後細かいヨコハケを、内面にはナデを施す。堅緻な焼成である。

12～63は、埴輪列周辺の流土除去中や、敷地内から採集した埴輪片である。

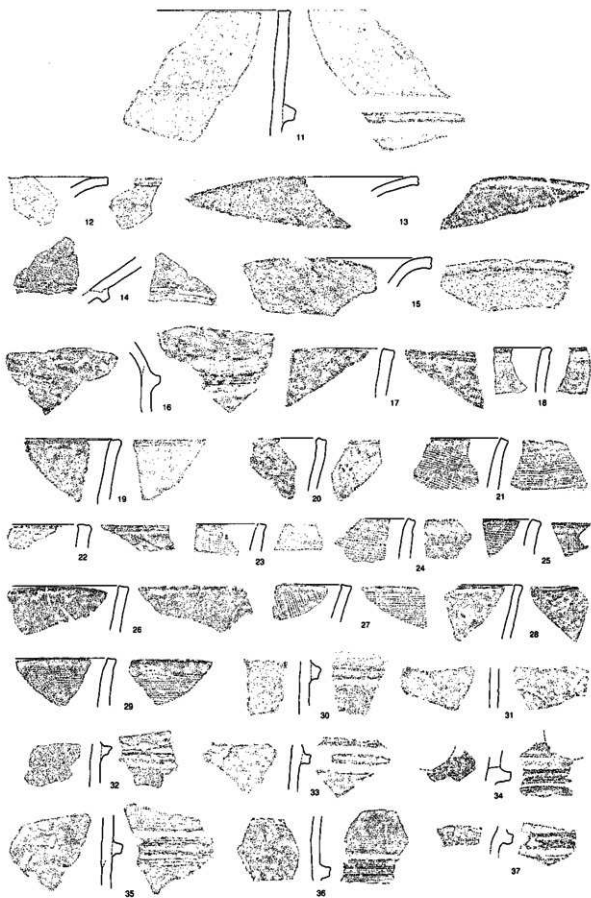
12～16は朝顔形埴輪で、12～15の口縁部片外面は、調整が不明なものもあるが、タテハケを施した後、ヨコナデを行なう。内面はナデ、あるいは粗いハケメがみられる。14は須恵質である。16は、外面に暗赤褐色の顔料を塗布している可能性が高い。

17～29は円筒埴輪の口縁部である。外面は、タテハケ後ヨコハケを施しており、ハケメは粗いものが多い。内面はヨコ・ナメ方向のハケメやナデが認められる。28、29は色調が須恵質に近い。

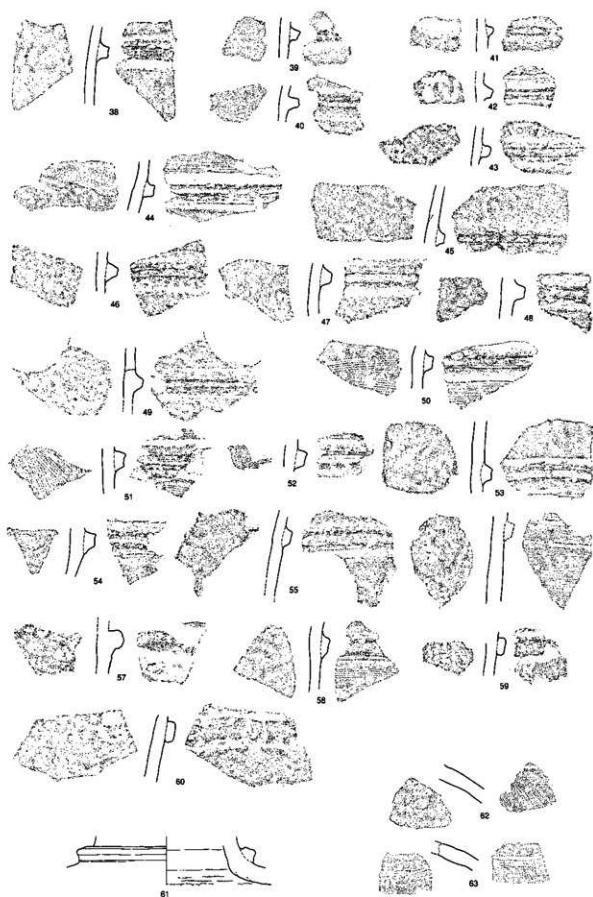
30～60は、円筒埴輪、もしくは朝顔形埴輪の胴部と考えられる。外面は2次調整にヨコハケを施すが、1次調整のタテハケが残存するものも多い。内面はハケメやナデによる調整を行なっているが、36にはヘラズリを施したような砂粒の動きらしきものも看取できる。30は円の中に1本の直線を入れた線刻文が施される。34、49には円形の透し孔が認められる。44、50は須恵質で、36も須恵質に近く赤紫色系の発色をしている。32、39の色調は他と比べやや白っぽく異質である。また、45は色調・胎土共に異質であり、やや赤っぽい。タガは、幅が狭く突出度の高いものから、やや幅広の台形状のものまで認められる。57のタガは整形が粗雑で、小片のため不明瞭ではあるが、最下段のタガと考えられる。また59、60も、タガには押圧技法が施されており、最下段のタガと考えられる。

61は蓋形埴輪の破片と考えられる。外面の調整は不明であるが、内面はナデと思われ、接合痕も看取できる。

62、63も、小片ではあるが蓋形埴輪の可能性が高い。62の外面はナメ方向のハケメ後上方をヨコ



第54図 出土埴輪1 (S=1/4)



第55図 出土埴輪 2 (S=1/4)

ナデしている。内面はあまり乾燥が進んでいない段階でナデたものと思われ器面が荒れている。G3は、須恵質で外面はヨコハケ、内面は工具によるヨコ方向のナデ後やや粗いタテハケによる調整を施す。沈線の上部はタガ等が剥がれたような痕跡が残る。上方は接合部で剥落している。

上記の埴輪は、いずれも黒斑は認められない。タガ、調整等の特徴から川西編年<sup>(註1)</sup>Ⅳ期、前方後円墳編年<sup>(註2)</sup>6～7期にほぼ相当するものと考えられるが、埴輪列の埴輪4のように最下段に2次調整を省略した新しい様相をもつものや、タガの突出度の高い古い様相をもつものの存在などから、ある程度の時間幅を考える必要もあると思われる。

今回の調査により、一段目から掘削され、裾部も大きく削平されているものと考えられた当該敷地の平坦面は、当時のまま残存していたことが明らかになった。また、改築箇所や母屋部分が立地する平坦面と、車庫の立地する敷地の南側には大きな段差が存在することから、この平坦面が後円部にみられる作山段につながる可能性が生じてきたと思われる。東隣の民家から東は大きく削平して敷地を造成しており、調査地とは3m以上も低くなっているため当時の段は消失しているものの、敷地及び道のレベルが作山段裾のレベルを示している可能性も否めない。今回出土した埴輪列も、作山段における祭祀のための区画である可能性もあり、このように考えるならば、長大な作山古墳の埴輪をすべて1基ずつ穴を掘り据えたのではなく、この部分のみこういった工法を行なったとも考えられる。

(平井)

註1、円筒埴輪の調整、時期等は、川西論文に準ずる。川西宏幸1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号

註2、広瀬和雄 1991「第3章 前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』

葛原克人 1991「第8章 備中」『前方後円墳集成 中国・四国編』



第35図版 埴輪列検出状況（南西から）



第36図版 埴輪列検出状況（南から）



第37図版 埴輪列半截状況（南東から）



第38図版 埴輪列完掘状況（南から）

埴輪一覧

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
1	円筒	外:調整不明 内:ナナメ・ヨコ方向のナデ、凹凸目立つ	外:7.5YR8/6(浅黄橙) 内:7.5YR8/6(浅黄橙)	赤茶褐色粒目立つ 長石・石英粒少	軟質 断面に黒化層
2	円筒	外:表面剥落、調整不明 内:調整不明、凹凸若干残存、ナデか	外:5YR7/8(橙) 内:5YR8/4(淡橙)	暗赤褐色粒目立つ 長石・石英少	軟質
3	円筒	外:タテハケ、2次調整省略か? 内:ナナメ・ヨコ方向のナデ	外:7.5YR8/8(黄橙) 内:7.5YR(浅黄橙)	暗赤褐色粒・長石・石英 粒少	軟質 断面に黒化層
4	円筒	外:タテハケ後部分近ヨコ方向のナデ、2次調整省略 内:ナナメ方向のナデ	外:7.5YR8/6(浅黄橙) 内:7.5YR8/8(黄橙)	赤褐色粒・長石・石英粒 少～中	軟質
5	円筒	外:タテハケ後B種ヨコハケ 内:ナデ後タテやナナメのハケメ	外:7.5YR8/4(浅黄橙) 内:7.5YR7/4(にぶい橙)	角閃石・雲母少、黒褐色 粒中、長石・石英粒少	やや硬質
6					欠番
7	円筒	外:タテハケ後B種ヨコハケ 内:ナナメ・ヨコ方向のナデ後タテハケ	外:7.5YR6/4(にぶい橙) 内:7.5YR5/1(褐灰)	角閃石・金雲母・黒褐色 粒少、石英・長石粒中	やや硬質 透し孔あり
8	円筒	外:タテハケ後B種ヨコハケ 内:ナナメ方向のナデ	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	角閃石・金雲母・茶褐色粒・ 長石・石英小粒少	やや硬質 透し孔あり
9	円筒	外:タテハケ後ヨコハケ 内:表面剥落、調整不明瞭、ナデか?	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR7/4(にぶい橙)	赤褐色粒・石英・長石粒少	軟質
10	円筒	外:調整不明 内:ナデ、一部タテハケか?	外:10YR7/3(にぶい黄橙) 内:7.5YR7/3(にぶい橙)	長石・石英・雲母多	
11	円筒	外:細かいタテハケ後ヨコハケ(B種?) 内:ナデ(工具による)	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	長石・石英・角閃石粒やや多	硬質
12	朝顔	外:粗いタテハケ 内:粗いヨコハケ	外:2.5YR3/1(暗赤灰) 内:2.5YR6/6(橙)	黒色粒少 長石・石英粒少～中	須恵質に近い
13	朝顔	外:調整不明 内:調整不明	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色・黒色粒少 長石・石英粒中	
14	朝顔	外:タテハケ 内:ヨコ・ナナメ方向の粗いハケ後一部ナデ	外:7.5R4/3(にぶい赤褐) 内:10YR4/1(褐灰)	長石・石英小粒中	須恵質 接合部で剥落
15	朝顔	外:表面薄く剥落、調整不明 内:ナデか?	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色大粒・長石・石英 粒多	やや硬質
16	朝顔	外:調整不明 内:工具(幅6m)によるナデ	外:2.5YR3/2(暗赤褐) 内:5YR6/6(橙)	長石・石英粒少～中	硬質 暗赤褐色顔料?
17	円筒	外:ヨコハケ 内:調整不明、ナデ?	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色粒中 長石・石英小粒中	軟質
18	円筒	外:ナナメの粗いハケ後ナデ? 内:ヨコ方向のハケ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)	長石・石英小粒中	やや硬質
19	円筒	外:タテハケ後細かいヨコハケ 内:オサエ、ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR7/6(橙)	茶褐色小粒中 長石・石英粒中	やや硬質
20	円筒	外:表面薄く剥落、調整不明 内:ややナナメの粗いハケ	外:10YR8/6(黄橙) 内:7.5YR7/6(橙)	長石・石英粒少	
21	円筒	外:粗いタテハケ後ヨコハケ 内:粗いナナメのハケ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	黒色粒少～中 長石・石英粒中	須恵質に近い
22	円筒	外:ヨコハケ 内:ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	長石・石英粒少	
23	円筒	外:粗いヨコハケ 内:粗いやナナメのハケメ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:5Y6/1(灰)	長石・石英小粒中	やや硬質
24	円筒	外:ヨコハケ 内:粗いやナナメのハケメ	外:10YR8/4(浅黄橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)	茶褐色・角閃石・長石・ 石英粒少～中	やや硬質
25	円筒	外:粗いタテハケ後ヨコハケ 内:粗いヨコ・ナナメ方向のハケメ	外:10YR5/2(灰黄褐) 内:10YR5/2(灰黄褐)	長石・石英小粒少～中	やや硬質
26	円筒	外:タテハケ後ヨコハケ 内:タテハケ	外:10YR5/2(灰黄褐) 内:10YR5/2(灰黄褐)	角閃石少 長石・石英粒中	硬質

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
27	円筒	外:粗いヨコハケ(B種) 内:粗いややナナメのハケメ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	長石・石英粒中	硬質
28	円筒	外:タテハケ後粗いヨコハケ(B種) 内:ヨコ・ナナメ方向のハケメ	外:10YR6/2(灰黄褐) 内:10YR6/2(灰黄褐)	黒色粒少 長石・石英粒少～中	須恵質に近い
29	円筒	外:粗いヨコハケ 内:粗いヨコ・ナナメ方向のハケメ	外:10YR6/1(褐灰) 内:10YR5/2(灰黄褐)	長石・石英粒少	須恵質に近い
30	円筒	外:調整不明 内:ナデ	外:7.5YR8/6(浅黄橙) 内:7.5YR8/6(浅黄橙)	黒色粒少 長石・石英粒少～中	線刻あり
31	円筒	外:ヨコハケ 内:ナデ(調整不明瞭)	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色粒中 長石・石英小粒中	弧状の線刻あり
32	円筒	外:タテハケ後一部にヨコハケ 内:不定方向のハケメ	外:10YR7/2(にぶい黄橙) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)	黒色粒少 長石・石英粒多	
33	円筒	外:やや粗いタテハケ(1次調整) 内:ナデ(工具による?稜あり)	外:7.5YR6/4(にぶい橙) 内:10YR5/1(褐灰)	長石・石英小粒少～中	硬質
34	円筒	外:ヨコハケ 内:タテハケ	外:2.5YR3/2(暗赤褐) 内:10YR5/2(灰黄褐)	黒色粒少 長石・石英粒少～中	やや硬質 透し孔あり
35	円筒	外:粗いヨコハケ(B種) 内:ナデ後上半ヨコやナナメのハケメ	外:10YR7/6(明黄褐) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	黒色粒少 長石・石英粒少	硬質
36	円筒	外:粗いヨコハケ 内:ケズリ後ナデ	外:2.5YR2/2(極暗赤褐) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)	長石・石英粒	須恵質に近い
37	円筒	外:調整不明 内:ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	黒色・茶褐色粒少 長石・石英小粒～中	
38	円筒	外:細かいヨコハケ 内:オサエ、ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色粒僅 長石・石英小粒中	やや硬質
39	円筒	外:調整不明瞭、ヨコハケ? 内:ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	長石・石英小粒～中	やや硬質
40	円筒	外:調整不明瞭、タテハケ(1次調査) 内:調整不明瞭、ナデか?	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	茶褐色粒少 長石・石英粒中	やや硬質
41	円筒	外:表面剥落、調整不明 内:表面剥落、調整不明	外:7.5YR8/6(浅黄橙) 内:7.5YR8/6(浅黄橙)	茶褐色粒僅 長石・石英粒少～中	
42	円筒	外:粗いヨコハケ 内:ナデ	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	長石・石英小粒中	
43	円筒	外:調整不明 内:調整不明	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色粒中 長石・石英小粒少～中	
44	円筒	外:粗いヨコハケ 内:粗いタテハケ後工具によるナデ	外:2.5YR4/2(灰赤) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)	長石・石英粒中	須恵質
45	円筒	外:表面剥落、調整不明 内:工具によるナデ、稜明瞭	外:5YR5/6(明赤褐) 内:5YR4/6(明赤褐)	長石・石英粒多	色調・胎土やや 異質
46	円筒	外:タテハケ後ヨコハケか 内:調整不明瞭、ハケメか?	外:10YR7/6(明黄褐) 内:10YR7/6(明黄褐)	茶褐色粒少 長石・石英粒少～中	
47	円筒	外:調整不明 内:調整不明瞭、ハケメか?	外:10YR7/4(にぶい黄) 内:10YR7/6(明黄褐)	茶褐色粒少～中 長石・石英小粒中	
48	円筒	外:調整不明、ヨコハケ? 内:ナデ	外:10YR8/4(浅黄橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)	長石・石英粒少～中	
49	円筒	外:表面剥落、調整不明 内:表面剥落、調整不明	外:7.5YR8/6(浅黄橙) 内:7.5YR8/6(浅黄橙)	長石・石英粒少	やや硬質 透し孔あり
50	円筒	外:粗いヨコハケ 内:粗いヨコ・ややナナメのハケメ後一部ナデ	外:10YR5/2(灰黄褐) 内:7.5YR4/2(灰褐)	茶褐色粒少～中 長石・石英小粒少	須恵質
51	円筒	外:粗いヨコハケ、タガ接合部粗いタテハケ 内:粗いナナメのハケメ	外:7.5YR7/4(橙) 内:7.5YR7/4(橙)	長石・石英粒中	硬質
52	円筒	外:タガ付近ヨコナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	長石・石英粒中	やや硬質
53	円筒	外:細かいヨコハケ? 内:オサエナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR8/6(黄橙)	茶褐色粒僅 長石・石英粒中	やや硬質
54	円筒	外:粗いタテハケ後ナデ 内:板状工具によるナデ	外:2.5YR4/2(灰赤) 内:2.5Y5/2(灰赤)	長石・石英小粒中	硬質

番号	器種	調 整	色 調	胎 土	備 考
55	円筒	外:調整不明 内:ナデ(種の幅広い)	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)	赤褐色粒中 長石・石英小粒中	軟質
56	円筒	外:タテハケ後ヨコハケ 内:工具によるナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:7.5YR5/3(にぶい褐)	長石・石英小粒中～多	硬質
57	円筒	外:調整不明瞭 タガ付近細かいヨコハケ 内:タテハケ後ナデか?	外:7.5YR7/8(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	石英・長石小粒中	最下級のタガ
58	円筒	外:粗いヨコハケ 内:ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR7/6(橙)	黒・茶褐色粒少 長石粒少～中	硬質
59	円筒	外:粗いタテハケ、1次調整のみ 内:調整不明瞭、ナデか?	外:10YR5/1(褐灰) 内:7.5YR7/6(橙)	長石・石英粒少	最下級のタガ
60	円筒	外:調整不明瞭、一部タテハケ残存 内:ナデ	外:10YR8/6(黄橙) 内:10YR8/6(黄橙)	赤褐色粒中 長石・石英小粒少	最下段のタガ タガ下端オサエ
61	壺	外:調整不明 内:ナデ、接合痕跡あり	外:7.5YR4/3(褐) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)		
62	蓋?	外:ナメのハケメ後上方ヨコナデ 内:ナデ	外:10YR5/2(灰黄褐) 内:10YR6/3(にぶい黄橙)	長石・石英粒少～中	やや硬質
63	蓋?	外:ヨコハケ 内:ヨコ方向の工具によるナデ	外:2.5Y4/2暗灰黄 内:2.5Y4/2暗灰黄	長石・石英粒少～中	須恵質 接合部で破損

(仮称)岡山日産自動車(株)総社営業所  
新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

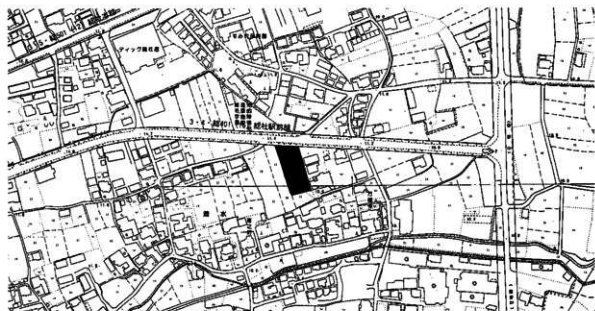
遺跡名 井手・オノ前遺跡  
所在地 総社市井手字オノ前1035番地  
調査期間 2002年11月19日～12月5日  
調査面積 約250㎡

調査の経緯

総社市街地の東方に位置する井手地区に、一級市道中央井手本線に南面して、岡山日産自動車株式会社の総社営業所が建設されることとなった。建設予定地の南約100m付近には地形からみて東西方向に流れる旧河道が存在していたものと考えられるが、当該地は周囲に比べ一段と高くなっていることから微高地が形成されていた可能性が高く、遺跡の存在も予想された。

営業所は2棟の建物からなり、基礎部分を地盤改良する予定であったため、遺跡が存在したならば破壊されるおそれがあることから、基礎部分に試掘トレンチを設定し、遺跡の有無を確認した。

試掘調査の結果、遺構は東棟の基礎の一部からは検出されたが、西棟の基礎部分からは全く検出されなかった。このことから遺構は東に密度が高く、西に行くにしたがって疎となることが判明した。工事期限内に余裕がないため、遺構が確認された東棟を全面、西棟については全面試掘した西側の基礎部分を除き、部分的にしか試掘しなかった東側の基礎部分のみを発掘調査することとした。なお擁壁部分の掘削については、幅が狭いため立会調査を実施した。調査終了後、直ちに地盤改良がなされたが、深さが2m以上にも及ぶため立会し、土層の堆積状況を把握した。



第56図 調査地位位置図 (S=1/5,000)

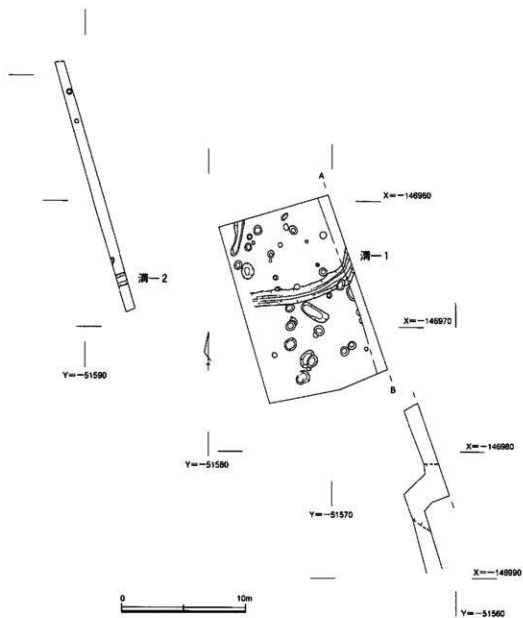


### 調査概要

基本的な堆積層序は第57図に示すように、表土直下から約30cmまでは中近世の水田層が存在する。その下層には粘質の強い層が厚く堆積し、4層に分かれる(5～8層)。地盤改良時の立会調査によると、さらに下層は地表下約1.3mで砂層となり、約1.45m付近で砂礫層となる。遺構は5層上面から検出されており、中には土器や炭・焼土を多く含むものもみられるが、遺構内埋土と周囲の堆積層との差異は総じて捉えにくい。

遺構としては、東側の擁壁部分で検出された住居址1軒他、全体で柱穴・土坑等約40基、溝1条、溝状遺構2条があげられる。

住居址は、弥生時代後期初頭のもので、床面上には炭化物が集積していた。炭化物は厚く堆積している箇所もあるが、全面に広がるわけではなく、土器も廃棄されているがいずれも炭層の上層から出土している。火災にあったものではなくゴミ捨て場として再利用されたものと考えられる。



第57図 遺構配置図 (S=1/300)



第39図版 調査地全景（北西から）



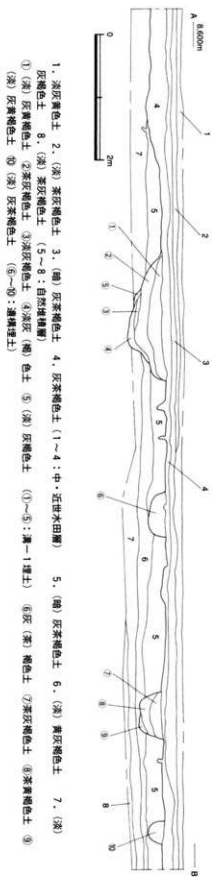
第40図版 遺構完掘状況（南から）



第41図版 土壌-4断面遺物出土状況



第42図版 溝状遺構-2 遺物出土状況



第58図 東横調査区東壁土層断面図 (S=1/50)

柱穴も検出されたが、調査範囲が狭いこともあり、まとまって建物となるものは認められなかった。

土城5は、埋土中に炭を含む層がみとめられ、土器等も若干含まれる。出土した土器からこの土城の時期は弥生時代前期と考えられる。

溝は1条検出され、幅約1m、深さ約60cmを測る。遺物はほとんど認められなかったが、小片が若干出土している。弥生時代後期の所産と考えられる。

特筆すべき遺構としては、2条の溝状遺構があげられる。この遺構の埋土には、いずれも炭・焼土を含む他、高温で焼けたと思われる小石粒が多量に出土している。この周辺で高温を使った何らかの作業が行われた可能性が高い。出土した土器から、弥生時代後期初頭の年代が与えられる。

以上の調査結果と、周辺の地形が西へ下がっていくことを考え併せ、集落の中心はさらに東に位置したものと考えられる。(平井)

## 平成14年度鬼ノ城発掘調査概要

所在地 総社市奥坂1762-10ほか

調査期間 平成14年4月18日～9月10日

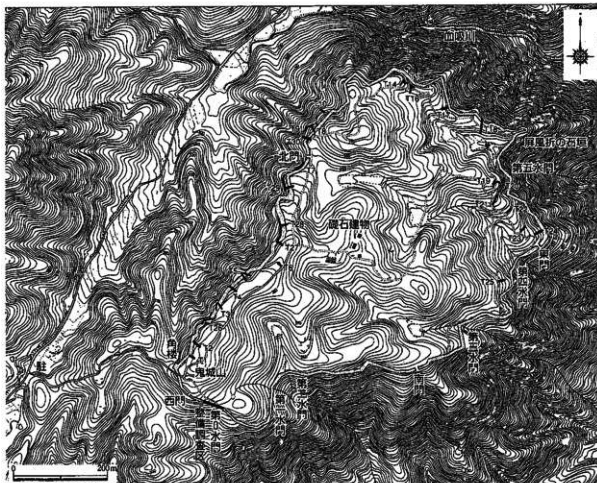
調査面積 約1,260㎡

### 1. 城壁線不明箇所の確認調査

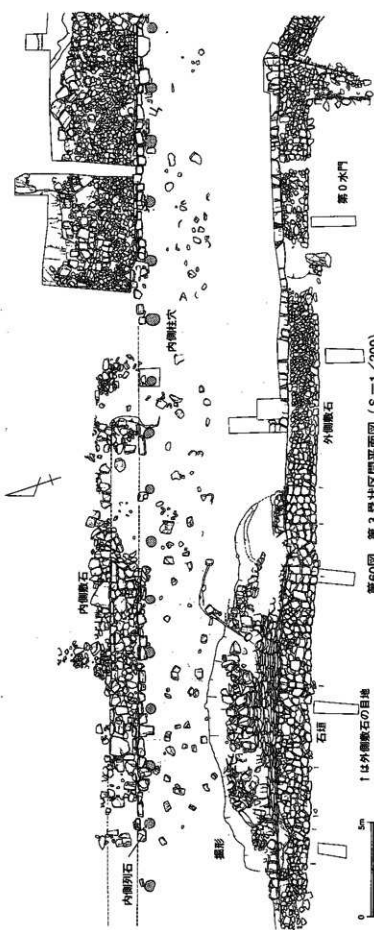
平成14年度は城壁線を主体とした確認調査と、史跡整備に伴う事前の発掘調査を第3塁状区間において実施した。城壁線の調査は昭和53年に鬼城山学術委員会によって実施され、位置関係や塁状区間の設定、そして城壁構造についても概要が示され調査研究の基礎になっている。

しかし、城壁線を確定するには未だ不明な塁状区間もあり、特に鬼ノ城の背面に該当する北東から北西側の城壁は、明治以降の砂防工事による地形の変更や、草樹林にはばまれて城壁を構成する遺構を見出し難い状況にある。

こうした現状から第14回鬼城山整備委員会（平成13年10月11日開催）では、今後史跡整備を推進していくに際し、城壁線の不明箇所に対する確認調査が必要との見解が示され、これを受けて総社市教育委員会では岡山県教育委員会の調査員派遣を仰ぎつつ、角楼から東門周辺までに合計27本のトレンチを設定することにした。調査の結果、18箇所のトレンチにおいて城壁と関連する遺構を検出したが、



第59図 調査地位置図（S=1/8,000）T11からT13は欠番



第60図 第3墓状区間平面図 (S=1/200)

残る9箇所のトレンチでは遺構を検出できなかった。

検出された遺構は版築盛土、外側列石・敷石、外側柱穴、内側敷石、内側柱穴、集石土壌などである。城壁を構成する各種の遺構がセットで判明したのはT27のみで、他のトレンチではいずれかの遺構が残存している程度であった。

調査の所見では北西側の城壁線(T1~T10)は主に版築土塁で構成されている事が判明し、唯一、谷部へ設定したT5においても版築盛土の痕跡を確認した。

一方、北東側は峻険で複雑な地形を利用し、上面のみに造成土を施したT4、T6や、屋根の稜線を城壁と化しているT21、T22等、自然地形を巧みに取り込んでいる状況が窺えた。

出土遺物は須恵器壺、壺片がわずかに出土している。

## 2. 史跡整備に伴う発掘調査

第1期史跡整備事業では角楼から第0水門周辺までを復元整備地区に設定しており、遺構の保存を図りつつ角楼、西門、第0水門、石垣、版築土塁などの遺構を可能な限り原形に近い形状で復元する予定である。

整備事業が本格化する平成13年には石垣から第0水門の前面に堆積していた流土を全て除去し、石垣、第0水門、版築土塁、外側敷石などを検出した結果、城壁の全容が明らかになった。発掘調査の成果を基に鬼城山整備委員会では

整備に向けての具体的な手法が検討され、次年度においても未調査部分に対する継続的な発掘調査が必要との指針が示された。

平成14年度の発掘調査は城壁の復元に先立ち、石垣から第0水門の城壁上に堆積している流土を全て撤去し、版築盛土からなる遺構面を検出した。それと同時に復元整備事業の一環として石垣のはらみ、ズレ、築石（註）の割れ、劣化の認められる箇所を一部解体・積み直しを行い、石垣の崩壊部分についても転落石等を補って修復と部分的な復元を実施した。また、石垣の落石崩壊の恐れがある箇所は、平成14年12月16日から平成15年2月7日までの間に石垣解体復元工事の中で立会調査を行っている。

調査の結果、築石は石面に対してさほど控えない石材を多用しており、背後には壁面から1.2～2.8m幅で裏込石が充填されていた。また、石垣の天端近くには裏込石の代わりに盛土を厚く被覆している状況が窺え、裏込石の機能が天端からの排水を意図していたかどうかは疑わしい。

さらに平断面の検討により、石垣を構築する際には版築盛土が天端近くまで築造された後に、掘形を穿ち石垣の上半を構築するなど、石垣構築に伴う合計4箇所の掘形を確認しており、複雑な過程を経て石垣が完成している。

城壁の立面には版築層が幾重にも盛土されている状況が観察され、築造過程を把握する事を目的に、版築層の大単位を抽出する事にした。この単位には石垣下半の構築と一体的に築かれていた版築層が山形となっており石垣の構築上、必要不可欠な単位として特筆される。

石垣から第0水門までの外側列石は現状では露出しておらず、平成12年度に設定した確認トレンチにおいても、外側敷石より下位に石材が配置されていた事から不明な点が多かった。しかし、今回の調査により部分的ではあるが列石が版築盛土によって被覆していたことが判明し、改めて外側列石の存在が確実となったのである。

第3壘状区間の城壁天端では内側柱穴を新たに検出し、合計23本の柱で遮蔽物<sup>?</sup>を構成していた事が明らかになった。また城壁の天端が尾部から頭部に向けて約13°の下り勾配となるため、内側列石・敷石の大半は流水等の浸食・流出により部分的に残存しているにすぎない。しかし、内側敷石が2段で構成されている箇所があり、基本的には第4壘状区間以降の敷石敷設方法と同一と見て良い。

城壁の残存は石垣から第0水門までが極めて良好に残存しており、全ての城壁を吟味しても希有の事例と言えるだろう。また、石垣・水門・版築土壘が近接して築造されている事から、個々の遺構の性格や構造はもとより、構築過程までもある程度把握できた事は重要な成果と考えている。

なお、平成13・14年度に実施した発掘調査の詳細は調査概要を近刊予定としている。（松尾 洋平）

註 古代の石垣については用語が確立しておらず、現状においては中世以降の石垣用語を援用せざるを得ない。ここで言う築石は石垣を構成する石材という意味である。



#### 4. 史跡整備事業の概要



## 鬼城山環境整備事業

### 平成14年度整備事業概要

鬼城山環境整備事業は平成5年度に設置した「鬼城山整備委員会」の指導・助言を受けて、平成13年度から第1期整備事業を開始した。第1期整備事業は平成13年度から平成16年度で、西門を中心に復元整備区間で実施する。この事業は文化庁の史跡等活用特別事業として採択されている。

平成14年度は、土塁復元、高石修復などを約45m区間で実施することとし、版築復元に先立ち土塁上の流土を撤去した。また、高石垣の修復はズレ、はらみのある部分の解体と、石垣積み足しを開始した。

しかし、整備事業を進めるために必要な許認可作業の調査などから工事期間の延長を行うこととなった。

西門復元は平成14年度で実施設計を行い、それに基づき建築部材の購入を実施した。

### 平成14年度事業経過

平成14年4月10日	国宝重要文化財等保存整備費国庫補助金・県費補助金交付申請
4月25日	第15回 鬼城山整備委員会（平成13年度事業実績報告、平成14年度整備事業方針、西門基本設計報告）
5月30日	補助金交付決定
6月23日	第16回 鬼城山整備委員会（平成14年度整備方針—高石垣修復、土塁復元、敷石・列石補修、西門復元）
9月2日	史跡鬼城山環境整備実施設計・監理業務委託契約 西門復元工事実施設計・監理業務委託契約
11月8日	第17回 鬼城山整備委員会（平成14年度整備事業工法、平成15年度整備事業方針） 史跡鬼城山環境整備工事契約（高石垣修復・土塁復元）
平成15年3月17日	計画変更承認申請書（工期の延長）
3月20日	西門復元工事契約

(谷山雅彦)



第61図 西門イメージ図

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	13
編著者名	谷山雅彦, 武田恭彰, 平井典子, 高橋進一, 松尾洋平
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号TEL0866-92-8363
発行年月日	2004年(平成16年)3月

**總社市埋藏文化財調査年報 13**

平成16年(2004)年3月20日印刷

平成16年(2004)年3月25日発行

編集発行 總社市教育委員会  
總社市中央一丁目1番1号

印刷 サンコー印刷株式会社  
總社市真壁871-2

